

神道興教論

完

磯部武者五郎述

磯部氏藏版

014235-000-8

特49-878

神道興教論

磯部 武者五郎 / 著

M23

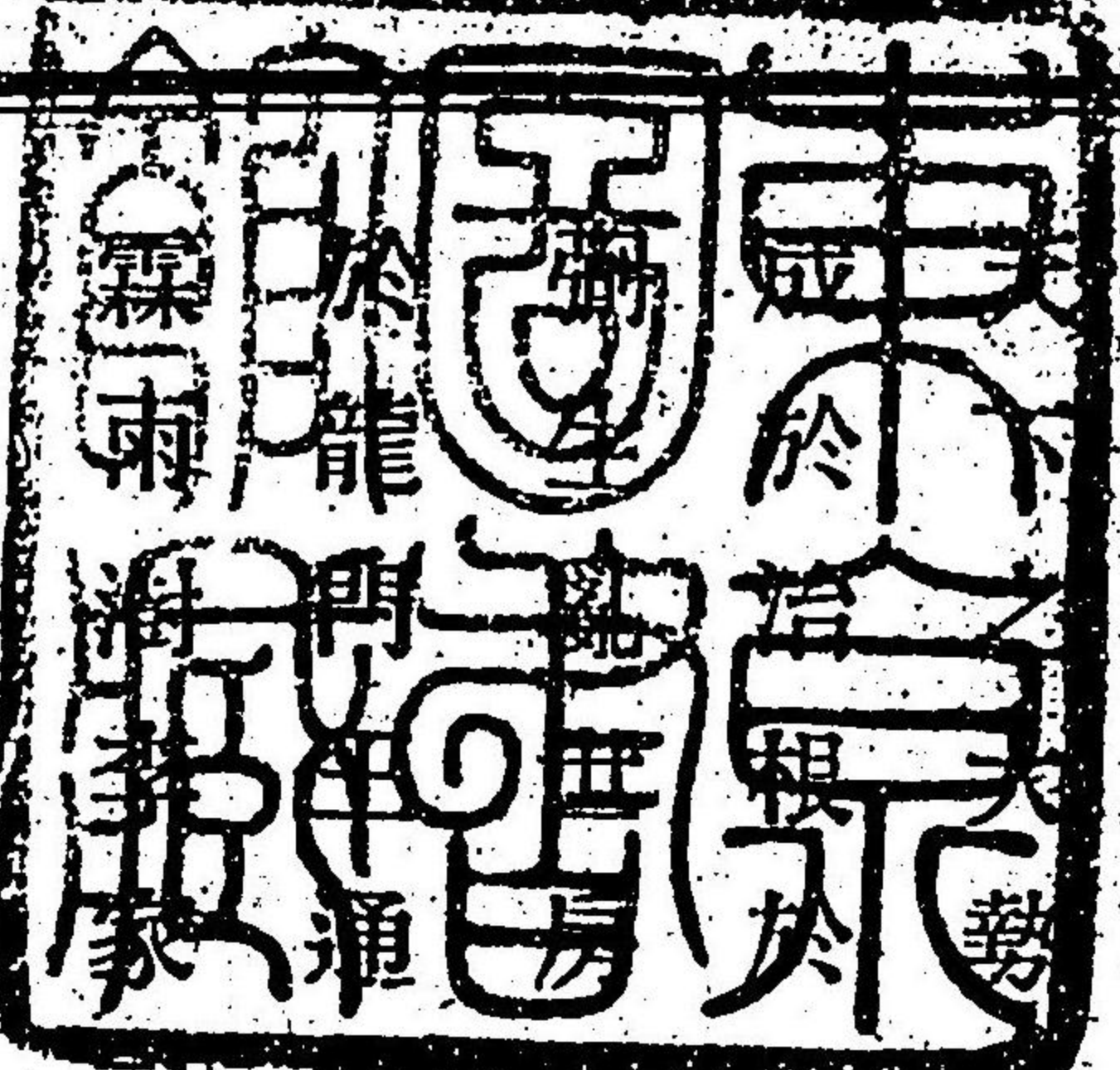
ABB-0563



特49 :
878

W 336 / 23

神道與教論序



夫下之夫勢一治一亂々不生於亂原於治
成於治根於亂 々世之奸臣來於治世治世之良
壽生於世 立齡杜如晦生於隋末淆亂之時游
於龍門 之門晦迹力學及唐起出爲蒼生之
霖雨 三百年之山河中臣鎌子在蘇我氏
 强梁之日養潛德於南淵翁之門起輔天智中興
 之鴻業天下之事皆然方今道德墜地修道者斷
 々乎拂地斯道亂矣於是乎天必將有降其人以



濟壞亂蓋理數之常而未見其人也頃者眎東海
磯部子所著興教論顧菟園冊子猶未足下雌黃
然春秋鼎盛抱不到水盡山窮則不休之志前程
万里所詣必不止于此嗚呼他日執吾東傳家鏡
照耀乎全地球者烏憂無其人也哉及刻成題卷
端素山道人省齋識時七十五

興教論序

玉銚の道てふものは天地の開け初にし時より人とふ
人の身におのづから備りて其道をふみ行ふ人を聖と
も賢き人とも尊ふとひ來にけらしこは皇國人のみな
らす天つ日の照らさぬ國氷の海の果にても人の形せ
しものゝみなこの道のそなはれるは今さら論ふへき
にあらず又この後千萬年天地のあらん限りは此道の
たゆる事あらぬは日月の光とともに明か也まして此
日本の本國には千早振神つ世より神なから傳はり來
ぬるぞ嬉しききはみにはありけれさるを中むかしよ

り孔子釋迦の道世に廣りてこの神ながらの道のた
すけとなりにしよりいつしかは、木、の有るかなき
かどばかりに埋れ來にけるをばやく平安の都向日の
岡なる六人部是香大人いたくなけかれしがあのれ安
政の頃蘆が散難波を國長柄の里の館にすみて田安の
殿の縣の令仕うまつりし折大人の皇國學の弟子とな
りて道のおくかきなつねし時、此道を皇國內はさ
ら也外つ國、迄ゆきし廣めまほしと折にふれ物語
られき今も耳の底にのこりていかでかど志をおし廣
めまほしく思ひつゝ、け忘るゝ事はなかりけれ共學ひ

の力少なく才淺ければ空しく心を痛めたりしが明治
の六とせの頃相川の縣にありてこの道の教正オシヘンツカサの職を
兼たりければいと嬉しくておほやけのつとめのいと
まには此道をおし廣めむといそしみしがはからずも
さはる事いで來ていたづら事となりにしぞかなしき
こと近き頃は西の國の學ひの道開けて人の心さか
しらになりゆきわか身にふみ行ふ人をあるか也とお
もふめる人もこゝらあればこの末いかになりゆくら
ん身は老くだちて目耳さへうとくしければ空しく
草の屋に朽果てこの道のさかえを見聞事なきやと常

く、なけきしにわが子武者兒がおふな、この道を
ふりおこさんと思ひ起していさゝか書かきあらはせる興
教論てふ書をおのれにしめしぬされど此書よみのよしあ
しはおのれが論ふかぎりにあらざればそは他し人々
の論ひに打まかせぬ只、年頃心をいためつる父が
志を繼むとの真心の嬉しさの餘り世の笑ひそじりを
も顧みずして其嬉しさの一ふしを書かきつけしになむ明
治といふ年の二十餘り二とせ十二月七十翁含翠庵の
あるししるす

吐露卑見

以問教中

之同志

己丑十二月 東海學人

自題

爰ニ興教論一卷ヲ述作ス敢テ之ヲ閣下ニ呈
シ高覽ヲ賜ハラントヲ望ム思フニ我太教カ
今日ニ勢力ヲ得ザルヲ嘆ズルモノ多シ而之
ヲ忍テ他日ノ堙滅ヲ憂ヘ其カ方法ヲ講スル
モノ少シ生ハ今日ニ之ヲ忍テ他日我太教ヲ
海外万國ニ及ホサントスル疎狂ノ大志ヲ抱
ク閣下幸ニ其疎狂ヲ憐ミ志ノアル所ヲ取ラ
ンコトヲ乞フ生ヤ自カラ揣ラズ漫然疎狂ノ言
ヲ録ス尙其狂ヲ教中同志ノ士ニ示サント欲

ス障屏ノ事情存スルナクシハ印刷以テ廣布
スルノ舉ヲ許サレシト切望ス

明治二十二年十二月

教末 磯部武者五郎謹啓

大成教管長平山省齋公閣下

凡例

- 一此書教中ノ同志ニ示スヲ以テ目的トス故ヲ以テ別ニ神道ノ教旨ニ
關シ喋々セス既ニ神道教ヲ知ルモノ、爲ニ述作スルヲ以テナリ
- 一此書教外ノ士ニ示スノ意ナシ然レモ五章以下八章迄ハ教外ノ士ト
雖亦之ニ依テ我教旨ノ一斑ヲ知ルニ足ラン
- 一此書余カ素志ヲ陳述スルモノニシテ神道ハ宗教ニアラズト云フ説
ヲ排シ神道ハ完全極美ノ宗教タル性質ヲ有スト云フ説ヲ扶クルニ
在リ首ニ宗教論ヲ述ブ所以是ニ在リ
- 一余カ神道教ニ關シテ述作ハ之ヲ以テ嚆矢トナス其教外ノ士ニ我々
教ヲ示スノ作ハ他日出版公スルモノ數種アリ乞フ之ヲ諒セヨ

以上

著者 識

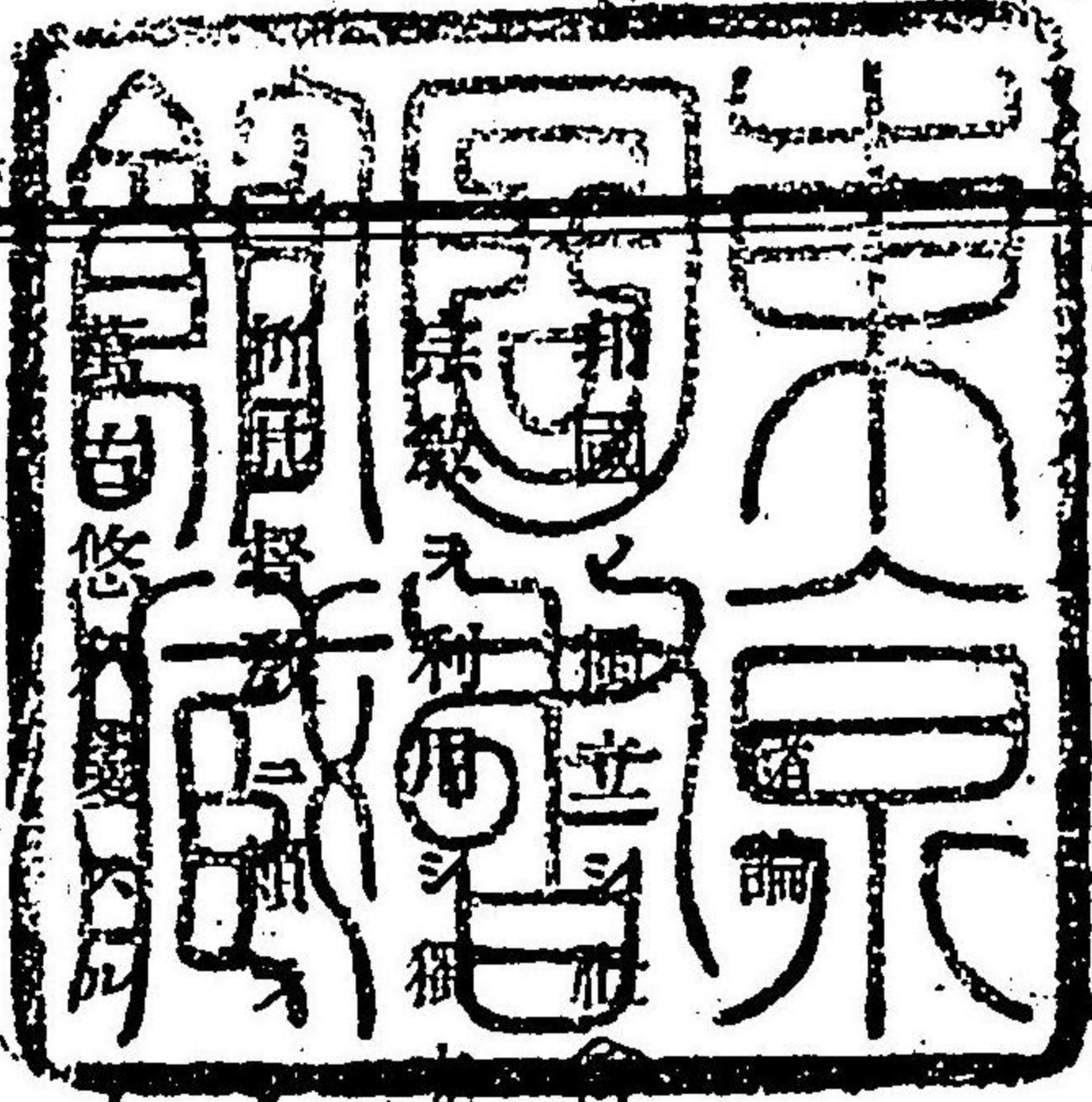
神道與教論

目錄

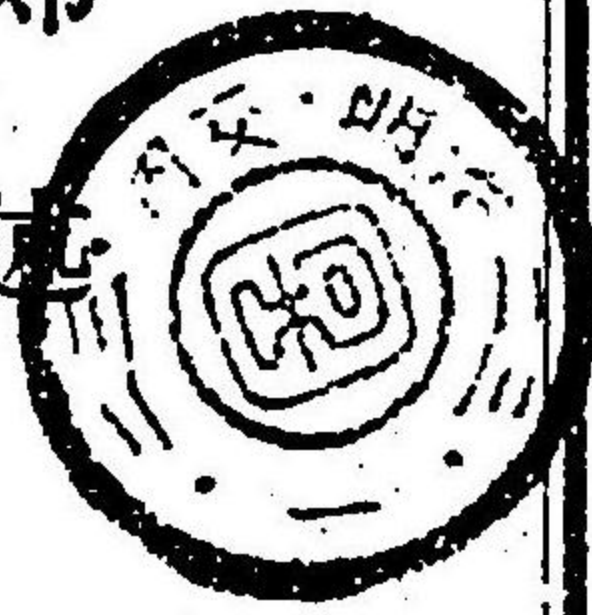
緒論

- 第一章 宗教ヲ論ス
- 第二章 宗教ノ必要ヲ論ス
- 第三章 宗教ノ前途ヲ論ス
- 第四章 宗教ト哲學トノ關係
- 第五章 神道教ト國學トノ關係
- 第六章 神道教ト哲學トノ關係
- 第七章 神道教ノ前途ヲ論ス
- 第八章 神道教ト國家トノ關係
- 第九章 神道教師諸君ニ望ム

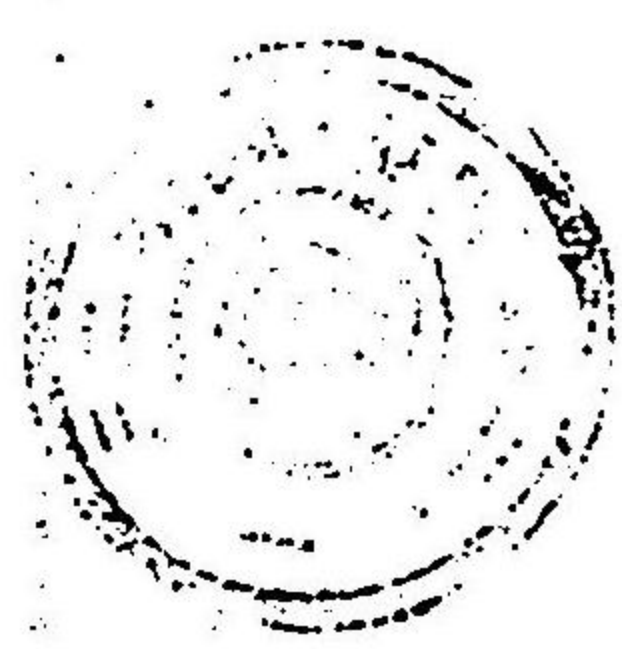
神道興教論



磯部武者五郎 述



文明ニ進ム所以ノ具ハ宗教ニ頼ル我帝國ハ何ノ
 大本ヲ立テ文明ノ進歩ヲ得ベキヤ佛ニ頼ランカ
 カ思フニ我神道教ノ教旨ハ惟神ノ一語而已此道ヤ
 ナク易ルヲナク廣大無邊物ニ應シテ遺スヲナク日
 月ノ照ス所霜露ノ墜ル所凡血氣アルモノハ必此教旨ニ從ハサルベカ
 ラザルナリ然ルニ如何セン我神道ハ未タ宗教ノ躰面ヲ完備セズ布教
 傳道其人ナク教具典籍其良ヲ欠ク是ニ於テ我帝國內ニテ宗教ヲ論ズ
 レハ佛耶二教ニ就テ論セザルベカラズ是勢止ムヲ得ザル所ナリ豈遺



憾ノ至ナラズヤ今我教中ノ諸君奮テ爲スベキノ事業ハ我神道ヲシテ
國學ト分離シ其純粹ナル教旨ヲ國典中ヨリ摺撫シ我教旨ヲ立テ教會
結集ノ制度ヲ改良シ以テ純然タル一ノ宗教ヲラシムルニアルナリ然
ルニ悲ヒ哉我神道ハ宗教ニアラズトノ論ヲ聞ク嗚呼我邦ヲシテ耶蘇
教ヲラシムルモノハ偶以此等ノ言ヲ發スルノ人ニ存ス思サルベケン
ヤ夫邦國ハ古今一日モ宗教ヲ廢スルコト能ハス神道ヲシテ國學トシテ
宗教トナサザルモ我帝國カ要スル所ノ宗教ハ佛耶二教ノ何レカ其
能ク効果アルモノヲ取ルベキナリ又此時ニ當リ全國ニ充滿セル天神
地祇ノ神殿社頭ハ彼ノ後世希獵ノ「デルハイ」ノ神殿ノ如キモノト一般
ニシテ後世只美術取調ノ爲ニ保存セラルモノトナラン而已政府行政
ノ方針ハ是ニ出テ可ナリ國民ノ神社ニ對スル觀念ハ決シテ此ノ如ナ
ルベカラズ永ク神社ノ尊嚴ヲ致シ國人ヲシテ遠ク皇祖皇宗ノ神靈ヲ

敬拜セシメ爰ニ愛國ノ情ヲ蓬勃トシテ抑制スル能ハサラシメ彼ニ敵
儼ノ念ヲ奮興セシムルモノハ我神道ヲ振興セシメテ而後其結果ヲ見
ルベキナリ且我神道ハ之ヲ發揮スルモハ他日完美極點ノ良教トナリ
管ニ我國ノミニアラズ海外ニ布教シテ無數ノ生靈ヲ妙境樂地ニ永住
セシムルニ足ルノ良質ヲ有セリ豈發揮セザル可ンヤ三十年以來我邦
ハ歐米ヲ師トシテ學術技藝一トシテ彼ニ習ハサルナシ我ヨリ之ヲ輸
出シ彼ヲシテ習ハサシムルモノハ寥々トナルナシ只僅ニ二個ノ望
アル而已一ハ美術ニシテ一ハ佛教大乘ノ教理ナルベシ我邦カ美術ニ
富ミ天然ノ秀絶アルハ世人ノ知ル處ニシテ殊ニ工藝圖案ニ至リテハ
世界各國其獨造ヲ許ス所ナリニユレシナルク大博覽會ニ工藝圖案ノ
金牌二十三個ノ内十七個ハ我邦人ノ手ニ落チ各國人ヲシテ喫驚セシ
メシニアラスヤ又近時歐人カ東洋ノ學問ヲ研究スルニ至リ漸ク佛教

ノ深遠ナルニ感シ佛教ノ玄理ヲ調和シテ新機軸ヲ出シ哲學ヲ開クニ至ル然レモ皆印度小乘ノ佛教ヲ傳フルモノニシテ時ニ或ハ「シヨ」エソワル氏ノ如キ厭世教ヲ立ツルニ至ル宜シク大乘ノ妙理ヲ彼ニ知ラセハ一新哲學ノ歐西ニ起ル刮目シテ待ツベキナリ大乘ノ妙理ハ我日本ニ存在スルヲ以テ我邦佛徒カ我國光ヲ揚ケ其功名ヲ收メントスル此一舉ニアルヘシ美術家ノ我國光ヲ揚ケ其功名ヲ收メントスルモ亦今日ニ在リ矧ヤ我神道ヲ世界一等ノ良教トナシテ而之ヲ海外ニ布教傳道スルニ至テハ其國光ヲ揚ケ功名ヲ收ムル決シテ美術佛教ノ比ニアラサルヲヤ我邦固有ノ宗教ヲ以テ彼ヲ導キ彼ヲ教ヘ學術技藝彼ヨリ受クル所ノ恩ニ報スヘシ余輩ハ確信ス我神道ヲ宗教トナシ其固有ノ美質ヲ發揮スルキハ他日完美極點ノ宗教トナツテ國ヲ益シ併セテ國光ヲ揚ケン諸君ヨ余カ言ヲ以テ放言トナス勿レ余ヤ蒲柳弱質ト雖

滿腔子是此精神ヲ以テ充塞ス諸君幸ニ余カ志ヲ憐ミ以テ同感ノ情ヲ添へ以テ一臂ノ力ヲ加へヨ若其人アラハ余ハ或ハ騏尾ニ附スモゼン或ハ敢先驅モナサン今狂妄ノ言ヲ陳べ以テ諸君ニ告ク幸ニ以下論述スル所ヲ熟讀アラントヲ望ム

第一章 宗教ヲ論ス

第一節 世人動モスレハ宗教ト云へハ基督教其モノヲ指シ佛教其モノヲ指ス是レ全般ニ涉ルモノト一部ノモノトヲ混シタルモノナリ今「鳥」ト云フ全般語ハ鳴雞鷹鷲等ヲ包ム直ニ雞其モノヲ鳥ナリト云フベカラサルカ如シ宗教ナルモノニ基督教アリ回々教アリ佛教アリ我神道教アルナリ今宗教論ニ入ルニ先チ此區別ノ瞭然タラサルキハ或ハ余ノ志ノ謬解セラルアラントチ恐ル何ントナレハ我神道教師ノ中ニ往々神道ハ宗教ニアラズト云フ先輩アルヲ聞ク余ノ考ニ依レハ神道

ハ宗教ナリトセハ興ルベシ宗教ニアラズトセハ衰ルコト必セリ神道ハ宗教ナルヲ論シ以其不了ノ解説ヲ排シ興教ノ任ニ當ラント欲スルナリ故ニ此編過半宗教論ヲ述ヘ基督教ニモ佛教ニモ何ノ教ニモ其基ヲ取ラス純然タル宗教論ノ一斑ヲ縷述シ以テ神道ハ宗教ニアラズト云フ論者ニ呈セントス

第二節 宗教ト云ヘハ人皆之ヲ卑下シ一言ノ下ニ之ヲ排ス是皆佛教基督教其モノヲ宗教ナリト思フノ致ス處ナリ殊ニ甚シキハ佛教基督教ノ弊處ヲ認メテ宗教ナリト思惟スルモノアリ是皆宗教ヲ知ラサルノ致ス處ナリ抑宗教ハ至寶重スベキモノニシテ天地ノ有ラン限リ未來永劫必存在スベキモノナリ今爰ニ宗教ノ定義ヲ述ヘン

第三節 宗教ノ定義 宗教トハ安心立命ノ働ヲナス術ナリ此定義ハ私見ニ出ルト雖大過ナカルベキモノト信ス人ニシテ安心立命スルコトヲ

得サルキハ一日モ生活スルコト能ハザルベシ若シ生活スルコトアリトスレハ即墮落破戒ノモノナリ釋迦ト雖救フコト能ハザルナリ佛之ヲ戒メテ曰ク無間地獄ニ陥ツ出ツルヲ求ム期ナシト其人生レテ人ノ人タルノ道ヲ行フテ國家ノ良民タルヲ辱スルヲ得ルモノ豈他アラシヤ苟モ心ヲ安シ命ヲ立テ造次顛沛モ必是ニ於スルニ非ルハナシ然ハ安心立命ヲ得ル所以ノ方法ハ如何賢人ハ理ヲ見テ自カラ覺リ己ヲ修メ人ヲ正スヲ得ベシ故ニタトヘバ宇宙ニ神明ノ存在スルナシト雖尙可ナリ尋常ノ士ニ至テハ之ニ則ルコト能ハス專心神ヲ敬シ信シテ自ラ修メ戒メテ爰ニ心ヲ安シ以テ命ヲ立ルヲ得ベキナリ若夫神明ヲ信ゼズ敬セズシバ所謂放僻邪肆爲セザルコトナキナリ孟子ハ恒産ナクシバ恒心ナシ恒心ナクシバ放僻邪肆爲セザルコトナシト謂ヘリ吁恒産アレハ人皆放僻邪肆ノ行ヲ爲サザルカ決シテ然ラザルナリ財産富有ノ人ハ悉ク

慎謹以テ身ヲ修メ家ヲ齊フルモノナルヤ世上ニ徴スルニ却テ之カ反
 對ニ出ルヲ見ルヲ如何セシ孟子ノ言未タ精カラザルナリ然ハ則恒心
 アリテ放僻邪肆ノ行ヲ免ルヲ得ル所以ノモノハ神明ヲ敬信スルノ一
 事ニ止ルト云フベキナリ賢者ト雖苟モ敬神ノ念ヲ缺ケハ罪戾ヲ免ル
 、能ハザルナリ元是神ハ人間修徳ノ目的物ニ吾人ノ假説セシモノニ
 アラザルナリ宇宙間ニ存在普遍セル万能ノ靈機ナレバナリ是ニ至テ
 宗教ノ定義ヲ次節ニ敷衍セン

第四節 前節ニ於テ宗教ノ定義ヲ下シテ「宗教トハ安心立命ノ働ヲナ
 ス術ナリ」ト言ヘリ前節ノ論述スル所ニ依リ安心立命ノ働ハ何ニ依テ
 爲スヲ得ルヲ知ルベシ彼禪僧カ一心觀念水波ノ觀ヲナス如キハ高
 尙ナル理想ヲ起スヲハアラン然レモ安心立命以テ社會ニ活動セント
 スルモノニ向テハ適セザルナリ只敬神ノ一事ヨソ爰ニ心ヲ安シ命ヲ

立以テ社會ニ活動スルヲ得ベキナリ是宗教ハ敬神ナル一事ガ骨子
 トナル所以ナリ敬神ノ一事ヲ欠ケハ宗教ニ非ザルナリ西洋ノ學者ハ
 宗教ノ定義ヲ下シテ曰「宗教ハ神人ノ關係ヲ示スモノナリト」是定義ハ
 能ク宗教ノ性質ヲ表スト雖不完全タルヲ免レス只ニ神人ノ關係ヲ示
 スモノトセンカ神人ノ關係ハ敬スルノ一事アルノミ然ハ則宗教ハ敬
 神ノ一邊ニ偏倚セン是ニ至テ神徳ヲ瀆シ神意ニ戾ルニ至ラン故ニ余
 ハ敬神ヨリ生スル所ノ效果即安心立命ノ術ヲ以テ宗教ノ定義トナス
 人苟モ安心立命以テ社會ニ活動シ爰ニ國家ノ良民タルヲ得ハ神意ニ
 合ヒ神命ニ從フモノナリ別段ニ神ヲ敬セザルモ神爵ノアルヲナカル
 ベキナリ宗教ハ無用トナルベシ然レモ神ヲ敬セズシテ安心立命スル
 一ノ能ハザルヲ如何セン

第五節 第三節ノ定義ニ於テ「宗教ハ安心立命ノ働ヲナス術ナリ」ト述

十
フ此術字ノ玩味セラレシヲ望ム今術字ニ於テ述フル所アルベシ但
此説ハ近時某氏カ其著述中ニ言フ處ニ同シ余某氏ノ説ニ雷同スルニ
非ス學理上同見ナル迄ノヲナリ凡ソ學問ハ理論應用ノ二ツヨリ成ル
東洋從來ノ學問ハ一ニ應用ノ點ノミニ傾キタリ從テ學說ノ卑陋誤謬
ニ陷ルモノ多シトス西學ハ大概此二門ヨリ成ル理學ハ理論ナリ化學
ハ實驗ニシテ應用學ナリ理化學ニ對スレハ電氣學器械學ハ應用學ナ
リ其他經濟學ニ應用經濟學アリ需要供給ノ如何ニ由リ物價ノ高低ア
ル所以ヲ説明スルハ經濟學ノ理論ナリ之ヲ社會ノ事情ニ徴シテ究ム
ルハ應用經濟學ナリ其ヨリ上級ノ學科論理學心理學等皆理論ト應用
ノ二ツアリ理論部ハ全ク論理ノ方則ニヨリ成立ツ應用部ハ即實驗上
ヨリ成ル其純正哲學即形而上學ハ全ク天地方有ノ原理ヲ探究シ方有
ノ生滅起伏隱顯出沒スル所以ノ理玄妙不可思議常理ヲ以テ釋スベカ

ラザルモノヲ説明ス全ク純粹ノ理論學ナリ之ニ對スル應用學ハ何ソ
ヤ即宗教ナリ古今東西宗教ノ起原ヲ釋ヌルニ哲學思想ノ起ルト其揆
ヲ一ニシテ其趣ヲ同ス而後世哲學ハ獨リ理想ノ上ニ進歩シ宗教ハ獨
リ開祖ノ立義ヲ其儘存スルヲ以テ其歸ヲ異ニシ其致ヲ違フノ觀アリ
是外見ノミ彼ノスベンサア氏ノ如キモ其究極スルニ至テハ理學宗教
其歸ヲ一ニシテ相助ケ其効ヲ見ハスト言ヘリ余敢テ宗教ヲ哲學ノ應
用トナス是安心立命ノ學ト云ハスシテ術ナリト云フ所以ナリ
第六節 以上論スル所ヲ以テ宗教ノ定義ヲ説明セリ現今地球上ニ存
スル所ノ宗教ハ儒教佛教波斯教回教猶太教希臘教耶穌教波羅門教等
アリテ皆定義ニ言フ處ニ合ヒ宗教タルハ相違ナシト雖或ハ謬信ヲ以
テ基トシ或ハ單ニ敬神ノ一偏ニ偏シ或ハ日常ノ細事ニ偏シ或ハ虛禮
假式ニ偏シ完全ノ宗教タルヲ得ルモノナシトス即哲學ノ應用部タル

ヲ得ルモノナシトス其神ノ存在ハ哲學ノ理ニ依ラザレハ知ルヲ能ハス日常事物當行ノ理万有ノ變化スル所以前程ノ如何ヲ知ルハ哲理ニ依ラズンハアラズ宗教家ハ哲理ノ許ス處ニ從ヒ教義戒律ヲ立テ文明ノ進歩國家ノ隆盛ヲ贊クルノ方針ヲ與ヘ宗教ノ信者ハ教師ノ訓導ニ從ヒ能ク神ヲ敬シ其心意ヲ清淨安靜シ以テ社會ニ活動シ國家ノ良民タルヲ勤ムベキモノナリ此ノ如クシテ其宗教ハ先ツ完全最美ノ宗教ナリト云フベシ今日之ヲ世界ニ求ム一モ之ニ應スルノ宗教アルヲナキガ如シ然リ而人智ノ開展スル今日ヨリ甚シキハナシ哲學ノ進歩日ニ其粹ヲ萃ムルニ方リ之ニ對スル應用部ナル完全ノ宗教ナキハ抑今日ノ欠點ニシテ世人カ完全ノ宗教ヲ望ムハ大旱ノ雲霓當ナラザルナリ竊ニ我神道教師諸君ニ望ム活眼ヲ開テ一新宗教ヲ要スル今日ニ方ルヲ思ヒ我惟神ノ大道ヲ發揮セヨ

第二章 宗教ノ必要

第七節 前章宗教ノ定義ニ依リ其性質ヲ概述シタルハ此章ニ於テ宗教ガ社會ニ及ボス効果ヲ述ベ其必要欠クベカラサル所以ヲ示サシ蓋前章ノ意ヲ細説スルモノナリ

第八節 中庸ニ道也者不可須臾離也可離非道也ト然レモ此道ナルモノハ卒性之謂道ニシテ所謂理論部ニ屬セリ修道之謂教是宗教ノ一即應用部ニ方ル夫道須臾モ離ルベカラザレバ之ヲ修ムル教モ須臾モ離ルベカラザルヤ言テ竣タス宗教ノ必要ナル知ルベシ衣服飲食ハ須臾モ離ルベカラザルナリ人ニシテ單ニ衣服飲食ノミヲ以テ他ヲ顧ミス道德ノ行ヲ欠クハ禽獸ト一般ノミ孟子ハ禽獸ニ近シトナス貝原益軒ハ一層激シテ曰人飲食逸居而無小補於世則蠢然天地之一蠹而已吁飲食逸居是ヲ人ト謂ハンヤ苟モ社會ニ活動シ國家ノ良民タラザル以上

ハ之ヲ人ト謂フベカラサルナリ人ヲ是ニ至ラシムルニハ宗教ハ一日モ離ルベカラズ

第九節 宗教ハ敬神ノ基本アルニ由テ人心ノ内部ニ立入り之ヲ支配スルモノナリ即人ノ靈魂ヲ支配スルモノナリ之ヲ宗教ノ特質トナス
道德其他ノ學問ハ只道ヲ示スニ止マリ之ヲ實行セシムルノ力アルナシ苟モ神ヲ敬シテ自カラ誓フニアラザレバ到底實効ヲ見ルコトナシ
第十節 人心ハ甚脆弱ニシテ常ニ外物ニ刺戟サレヤスシ常ニ外物ノ制スル處トナレバ所謂自暴自棄ナルモノニシテ安心立命ノ幸福ヲ棄ルモノナリ自カラ外物ヲ制シ其奴隸タルヲ免ル、ニハ意識ヲ強メテ之ニ當ラザルベカラズ是賢人哲士ノ事ナリ常人ノ能ク爲ス所ニアラズ其心囊ハ喜怒哀樂ノ情哀樂ノ感愛憎ノ念交互往來スルニ方テ能其情感ヲ調和シ發シテ節ニ中ラシメ其本性ヲ失ハズ靈魂ヲ幽瞑ノ裡ニ感得

セシメ無形ノ幸福ヲ稟クルニ至テハ神ヲ敬シ信シ人ノ知ラサルモ神明ノ來格アルヲ知テ而後ニ能スベキナリ即人心ヲ左右シ一舉一動節ニ中ラシムルハ宗教ノナス所ナリ

第十一節 世ノ愈開クルニ方テ人々ノ尤要スル處ノモノハ何ゾヤ道德ヲ全シ積極的ニ善ヲ修ムルニ在リ其社會ニ活動スルニ方テハ事情万端ナリト雖信義勉強耐忍確乎不拔ノ志操ヲ以テ最要用ナリトス此等ノ諸徳ハ人種ノ異同習慣ノ遺傳ニ依ルト雖宗教ノ力能ク之ヲ消長セシムルヲ得ルナリ夫人未來前途ヲ樂ミ神助ヲ冀フノ情アレバ勉強耐忍確乎不拔ノ志操成ラン幽瞑ノ神罪ヲ懼レハ能ク信義ヲ守リ索隱行怪ノ事ナカラシ此ノ如キ諸徳ハ皆社會文明ノ要素トナルモノナリ宗教能ク是等ノ諸徳ヲ獎勵セハ文明ノ基本ハ宗教ニアリト云フベシ
歐人言フ石炭ハ文明ヲ生ムノ母ナリト夫レ石炭ノ用タル漁船走リ漁

車飛ビ工藝伎術紛トシテ起ル實ニ文明ヲ生ムノ母タリ然レモ是外相
 ノミ有形上ノ事實ノミ石炭ノ用アリト雖器械工藝ノ發明進步ヲナス
 ハ確乎不拔耐忍勉強ノ諸德ニ依ラズンバアラズ渺茫タル大洋ヲ航リ
 人土有無ノ境ニ向フハ常人ノ能クスル處ニアラズ「コロソボス」ハ是ヲ
 ナセリ「コロソボス」ノ英雄ニシテ尙十字架ヲ携ヘ一心天神ヲ誠敬スル
 ヲ見ル身鷄林ニ入テ猛虎ヲ手搏スト云フ加藤清正ノ如キモ尙南無妙
 法蓮華經名號ノ旌旗ハ後ニ隨フト云フ彼ノ「ミル」氏カ平常宗教ヲ取ラ
 ザリシモ其愛妻ノ亡ヨリ悲哀ノ念生シ宗教ノ感ヲ起セシカ如キ孔子
 ノ陳蔡ニ苦ムヤ天ヲ呼ブガ如キ吁人心ノ脆弱ナル未來永劫宗教ノ必
 用ナルヲ見ル且太古蒙昧ノ時ニ出テタルモノハ世ノ開クルニ從テ其
 迹ヲ亡フ宗教ハ然ラズ太古草昧ノ世ニ兆シ世ノ開進スルニ從テ其必
 用ヲ増セリ

第十二節 尙其必要ナル諸點ヲ述フベシ
 道德ト宗教トノ關係

世ノ宗教家大概宗教道德ノ二者ヲ混セリ今之ヲ辨シテ其關係ヲ述ベ
 ノ道德ハ修身齊家交際上人ノ守ルベキ道ヲ云フ然レモ道德ハ只道ヲ
 示スニ止マリ人ヲシテ實行セシムルノ効力ナシ且道德ノ原理良心ノ
 在存等ハ宗教ニ依テ知ル能ハス道德學即チ「エジツク」ナル學科ノ能ス
 ル所ナリ故ニ全ク宗教ト離レテ其道ヲ示スベキガ當然ニシテ宗教ハ
 之ヲ行ハシム器關タラズンハアラズ現今ノ支那國ヲ見ヨ孔子以來道
 德ヲ示スノ書ハ四子六經ノ外汗牛充棟當ナラズト雖賄賂公行民ニ廉
 耻ナシ是宗教ノナキニヨル儒教ノ宗教タラザルニ由ル

衛生ト宗教トノ關係

衛生上身軀ニ有害ナル事項ヲ示スモ實行セシムルノ力薄シ妄念妄想

妄慾妄執ノ身軀ヲ害スル殊ニ大ナリトス此等ハ皆宗教ノ力ヲ假テ之
 ヲ夷ケ衛生上有益ナル條項ヲ行ハシムルヲ得ベキナリ殊ニ國民衛生
 ノ點ヨリ考フレハ國ニ民心ヲ満足スベキ宗教ナキハ瘋癲狷介ノ士
 路上ニ横ルニ至ラン
 理財ト宗教トノ關係
 理財上重ナルモノハ節儉ト勤勞トニ在リ而節儉勤勞ノ道ヲ示スモ之
 ヲ實行セシムルニハ宗教ノ力ニ依ル工場ノ職工ヲシテ能ク神ヲ敬シ
 己ヲ修メ勤勉スルアラハ其生産力ヲ助クル大ナルベシ殊ニ商業ニ關
 シテハ信用ナルモノハ生産力ヲ増シ貨幣ノ需要ヲ省ク効力ヲ有セリ
 信用ハ道德上ノ範圍ニ屬シ宗教ニヨルコアラズンバ信用ノ効ヲ見ル
 能ハザルナリ

法律ト宗教トノ關係

法律ハ表面ノ事ヲ管ス法律ノ禁スル處ハ社會ノ表面ニ止マリ人心ノ
 内部ニ入ラズ即チ法律ニ於テハ時アツテ意思ノ有無ヲ推測セザルナ
 リ然レモ表面ノミヲ禁シテ能ク社會ノ安寧幸福ヲ求ムルヲ得ルカ決
 シテ然ラザルナリ人心ノ内部ヲ正スニ非ザレバ表面ヲ正スヲ得サ
 ルナリ人心ノ内部ヲ正スハ宗教ニ依ル且夫日常万般ノ事皆法律ヲ以
 テ之ヲ正サンカ社會ハ一ノ争鬪場タルヲ免レズ法律上ノ關係ハ權利
 ノ破壊スルキニ生ズルナリ權利ノ破壊セズシテ法律上ノ關係ヲ生ズ
 ルコトナシ法律上ノ關係ハ人生世ヲ送ルニ際シ其終極ノ事務タラズン
 バアラズ苟モ能ク互ニ權利義務ヲ重シ相犯スヲ莫ラシカ法律ハ不用
 ニ屬スベシ吾人終極ノ目的ハ此點ニアルナリ是ニ達ントスルニハ宗
 教以テ人心ノ内部ヲ正ササルベカラズ
 政治ト宗教トノ關係

政教ノ相關ハ人能ク言フ處ナリ善政良法アリトモ人民ノ道德ニシテ進マズ陰險狡黠ノ風日ニ長ゼハ徒政空法タルノミナラズ遂ニ國ノ亡フニ至ルノ例多シトス故ニ宗教以テ人民ノ道德ヲ進メ善政良法以テ人民ノ幸福ヲ進メハ眞ノ文化ヲ見ルヲ得ベシ且近來歐洲各國ニ破壞主義共產黨社會主義厭世教等ノ出ルハ人民智識一般ニ普及シ政治法律獨リ進ンテ而安心立命ノ具タル宗教ノ進マサルニ職由スト知ルベシ外界ノ事物進歩シテ之ヲ行フノ具欠ケ内界ハ安心立命今日ニ處スルヲ得ズ幽志鬱結破壞主義トナリ社會主義トナリ政治上ノ秩序ヲ亂ス大ナリ政教相關シテ政治上ノ進歩安寧幸福ヲ見ルベキナリ

國家ト宗教トノ關係

人民ハ國家ニ服從スルノ義務ヲ有シ主權者ノ命ヲ奉セサルベカラズ主權者ハ宗教ノ力ニ依リ國民ノ心意ヲ一致シ宗教上ノ熱心ヲ以テ國

民ヲ團結スベキナリ國民ノ過半ハ理論上自己ト國家トノ關係ヲ認知シ服從スルモノニアラズ多クハ宗教上ノ訓戒ニ依リ國家ニ服從シ主權者ノ命ヲ奉スル者ナリ之ヲ推セハ宗教ハ國家ヲ維持スルニ必要ナリト云フベシ

第十三節 前節ニ於テ宗教ガ關係スル處ノ其必要ナル諸點ヲ指摘シタリ宗教ガ日常必須缺クベカラズ未來永劫存セサルベカラザルノ理由ハ充分説明シタリト信ス而尙一言記シテ此章ヲ終ラントス是ニ注意スベキハ其宗教ガ卑野ニシテ文明ノ進歩ニ適セス却テ之ヲ妨クルノ具トナリ或ハ其國民ノ性情ニ適セス其國家ノ組織ニ反スルガ如キアラバ其害亦甚シカルベシ宗教家タルモノ此點ニ注意セズ己ノ信ズル處ニ異ナルモノハ目シテ異教トシ邪說トスベカラズ宜シク潛心考察利害得失ヲ計リ判セザルベカラズ

第三章 宗教ノ前途

第十四節 既ニ宗教ノ定義必要ナル所以ヲ論述ス宗教ノ未來永劫必ず存セザル可カラザル以上ハ將來宗教ハ如何ナル形境ニ至ルヤ豫メ推定シ其針路ヲ假定シ教法家ハ之ニ率由スベキヲ必セリ其前途將來ヲ推測スルニハ二個ノ方法ニ依ル一ハ宗教ノ起原ヲ知り以テ將來ヲ推ス一ハ現今世運ノ變遷進歩スル形狀ニ就テ將來ヲ推ス是ナリ

第十五節 其一方宗教ノ起原ニ依テ將來ヲ推ス宗教ノ起ルヤ必要上ヨリ起ルモノニシテ偶然ニアラザルナリ妄信妄想ヨリ起ルト云フハ外形上ノ見ノミ心理學上ヨリ觀察スレバ心ヲ分解シテ智情意ノ三ツトナス太古ニアツテハ情ノミ熾ニシテ智發達セス直情徑行其發スル所ニ任セバ内ハ以テ自暴自棄スルニ至リ外ハ以テ社會ノ秩序ヲ亂スニ至ル是ニ於テカ其ノ必要ニ迫ラレ隱然宗教思想起ルナリ其漸節情

ノ熟スルヤ是ニ智力ノ漸ク起ルヲ見ル宗教ハ情ニ基クモノニシテ學術ノ起ルニ先ツテ出ツ學術ハ智力ニ基クモノナリ且百般ノ學術ヲ調査スルニ其應用部ハ必ス先ニシテ理論部ハ其後ニ出ルハ皆然ラザルナシ宗教モ其理論部タル哲學ニ先ツテ出デシモノナリ故ニ未開ノ地哲學未起ラサル處モ宗教思想ノ存スルアリ宗教思想未タ見レザル處ニ哲學ノ起リシモノハ未是レアラザルナリ

第十六節 世ノ進ムニ從テ智力ハ泉ノ湧火ノ燃ルカ如ク其底止スル處ヲ知ラズ學術日ニ開ケ人目ヲ一變ス此變遷ハ彼「オーガスト、コント」ノ言フ處ニ符合ス「コント」ハ人智進歩ニ三區域アルヲ唱フ第一ヲ認信ノ時代ト云ヒ第二期ヲ道理ノ時代ト云ヒ第三期ヲ實驗ノ時代ト云フ爰ニ此ヲ解説セシ第一期ニアツテハ智識開ケス全ク迷フテ之ヲ信ス即迅雷ノ般々トシテ鳴ルヲ聞テ是雷神カ戯ニ身邊ノ大鼓ヲ打ツナ

リト信スルナリ第二期ニ至テ人智漸開ケ雷鳴ハ陰氣ノ鬱結致ス處ト
 ナス而陰氣ハ如何ナルモノナルヤヲ説明セザルナリ支那ノ學術ハ此
 期限ニ止マレリ第三期ニ至レハ實驗シテ氣象ノ如何ニヨリ電氣ノ作
 用タルヲ知ルノ類ナリ如此人智ハ進歩スルニ從テ學術其精ヲ極メ
 粹ヲ抜ク而其情ヲ支配スル宗教ハ蔑如スルニ至ル蔑如スルノミナラ
 ズ之ヲ排除スルニ至ルナリ是宗教ハ情ニ關シ事物實驗ニ依テ來ルニ
 アラズ且太古ニ胚胎スルヲ以テ謬信ヲ基礎ニ取ルモノ多クレバナリ
 第十七節 智力ノ發達スルニ從テ情操情感ニ關スル諸徳ヲ失フハ當
 然ナリ昔日ハ直情徑行之ヲ制スル必要上宗教起ル今日ハ智力ノ發達
 ハ直情徑行之ヲ制スルノミナラズ之ヲ亡フニ至ル而人薄情タルヲ免レ
 ズ即智力ニ任セテ其情ヲ遣ルニ至ルナリ隱險ノ風日ニ長スルヲ如何
 セン是ニ於テ宗教ノ必要ハ亦昔日ノ比ニアラズ智力ノ發達學術ノ進

歩スルニ伴テ情ニ關スル宗教ノ發達進歩ヲ要スルナリ宗教進歩ハ學
 術ノ進歩ト同等ノ地位ヲ有シ其應用部ヲザルベカラズ今日ニ於テ
 ハ情操情感等ハ智力之ヲ左右スルヲ以テ宗教ハ單ニ情感的ノモノタ
 ルニアラズシテ智力的ノ宗教タラザルベカラズ

第十八節 宗教ノ起ルヤ情ヲ以テス其愈必要ナルヤ亦情ヲ以テス將
 來ハ智力ノ旺盛ナル今日ノ如ニ止マラズ宗教ハ學問ノ應用部タルヲ
 以テ智力ニ基礎ヲ取リ智力的ノモノトナリ眞實无妄ノ教旨タラサル
 ベカラズト信ズ而密咒加持ヲ施シ荒唐無稽ノ傳說ヲ唱ヘ其所爲ノ隱
 微ニ涉ルハ其起原ニ反スルモノニシテ將來ハ智力上ヨリノ排除ス
 ルトコロトナリ亡ブルニ至ランノミ

第十九節 又其一方現今ノ世運變化進歩ニ就テ宗教ノ將來ヲ推ス世
 運ノ進歩スルハ天理ノ自然ニ出ルモノニシテ學者ハ其究極スル處ハ

他日極美世界即黄金時代トモ稱スベキ時ニ達スベシト然レモ是時代
 世界ハ一ノ假想スルニ止マルト雖其進歩ノ究極スル處ハ必ス今日想
 像シ得ザル處ノ幸福世界ニ達スベキナリ然ラハ則宗教モ此點ニ着目
 シテ世界ノ進歩ニ伴ヒ之ニ從ハザルベカラズ之ヲ妨害スベカラズ
 ニ然ルノミニアラズ世運ノ進歩ヲ助ケ積極的ニ賛成セザルベカラズ
 第二十節 宗教ノ將來ハ之ヲ智力ニ本ケテ世運ノ進歩ヲ助ルニ足ラ
 シメハ善美ノ宗教タルベキナリ故ニタトヒ卑野ノ宗教ト雖能ク此二
 點ニ注意シ教義ヲ改良セバ必ス將來世界ニ行ハル、宗教タルベシ若
 シ此二點ニ背馳セハ其教ハ迹ヲ世ニ絶ツニ至ラン世人動モスレハ謂
 フ基督教ハ能ク人ヲ歸依セシム將來ノ宗教タル者ハ基督教ナリト又
 謂フ佛教高尚哲學ノ眞ヲ含ム將來ノ宗教タルベシト余ハ常ニ之ニ答
 テ曰ク將來ノ宗教トナリ世界人心ヲ支配スルモノハ今何教ナリト云

フヲ得ズ能前述ノ二點ニ適スルモノ將來ノ宗教タルベシ佛教高尚ナ
 リト雖此二點ニ注意セズハ他日迹ヲ絶ク我神道ノ如キハ其跡ハ惟
 神ナリ之ヲ智力上ニ基ケテ教義ヲ立ツルハ容易ナリトス其第二點世
 運ノ進歩ヲ助クルニ至テハ布教ノ方法如何ニ在リ我教師諸氏ノ自カ
 ラ注意スルニ在リ

第二十一節 將來ノ宗教ハ既ニ之ヲ假定ス爰ニ智力ノ發達ノミニテ
 宗教ノ之ニ伴ハザル弊害ヲ述ベシ現今歐洲各國ハ「コント」ノ所謂第三
 期實驗ノ時代ニ方ル「ペーコン」ノ歸納法ヲ唱フルヤ之ニ依レハ實驗觀
 察大發明ヲナスベシト而氏ハ一ノ發明ヲナス「ナシ」然レモ其後世ヲ
 導クハ即有リ「ユートン」ノ如キ「ケプラ」ノ如キ「ガレリオ」ノ如キ「コロ
 ソボス」ノ如キ一大發見ヲナスヤ舊來ノ定説頼ムベカラザルヲ以テ實
 驗ノ學科紛トシテ起ルニ至ル形而下ノ學科ニ止マラズシテ之ヲ形而

上ノ學科ニ及ボシ道德心理等ノ原則ヲ定ムル實驗ヨリ之ヲ考フルニ至リ敬神ハ妄念ヨリ生ズ道德宗教ハ經驗ヨリ來ル良心ハ遺傳ナリト道德ノ一科ヲ修ムルニ方テモ心性ノ舉動人牀ノ構造其他食物等ノ供給如何ヲ考察セサルガ如キニ至リ其結果ハ到底人ノ真情ヲ冷却スルニ過キズ而其學該博ヲ要シ是日モ暇給セザルニ至ラン又地質動物植物等ノ學科ヲ修メテ專ラ實驗ニノミ從事スルニ方テハ人情冷淡ニ傾クアリ英國ノ「フランシス、パワ、コッペ」婦人カ現時實驗的ノ學術其首座ヲ占ムルヲ以テ之ニ對スル意見ヲ草セシ論文ハ余輩之ヲ六合雜誌ニ譯載セルヲ見タリ誠其病ニ的中スルノ言ナリ其要ヲ採ラン曰蓋科學的教養ハ常ニ最初ニ最下等ノモノヲ思考セシム物質的ノ事實心裡ニ最上位ヲ占メテ眼中更ニ精神的ノ意味ヲ存セザルナリ之ニ於テカ物質家ハ其母ノ眼珠ニ溢レ出ルノ紅淚ヲ見テモ之ヲ悲哀トセズ其淚

「ソーダ」石灰ノ鹽化炭酸ノ溶解等ナリト解釋ヲ下シ其原因タル母ノ心中斷腸ノ悲痛アルヲ知ラズシテ頭腦淚液ヲ壓セルニ由ルトナス而母死セハ其墓地ニ臨ミ墓中近傍ヲ徘徊注視シ直ニ動植物ノ彙類解釋ヲ初ム蓋亦怪ムニ足ラザルナリ夫レ此ノ如ク科學的精神ヲ以テ固結セラル心意ハ頑硬無情ニシテ人間ノ困厄疾病ヲハ何トカ思惟スルヤト」
 第二十二節 之ヲ要スルニ實驗進步其極ニ至ルト雖到底有形事物ノ解釋ニ止マリ無形無象界ニ入テ其解釋ヲ試ムトハ未タ能ハザルナリ人皆言フ實驗ノ進ニ從テ智識煥發幸福増加スト然レモ無形無象ノ智識ヲ増シ無形無象界ノ幸福ヲ増ストハ未タ著シキヲ見ザルナリ
 第二十三節 論シ是ニ至テ人余ヲ目シテ實驗ヲ斥クルモノトナストチ恐ル余ハ實驗ヲ貴ブモノナリ智識幸福ニシテ實驗上得ラルベキ以上ハ之ヲ實驗ヨリ得ント欲スルナリ有形界ニ智識幸福ヲ與フルモノ

ハ實驗ノ專ラスル所ナリ唯實驗ノミニ偏シ無形無象界ノ研究ヲ欠ケ
ハ其弊害ヤ「コツベ」婦人ノ指摘セラル所ナリ

第四章 宗教ト哲學トノ關係

第二十四節 實驗ノ進ムニ從テ人空想假説ヲ信セズ昔日ハ理由ヲ問
ハズシテ直ニ之ヲ信ズ今日ハ其理由ヲ問フテ而後之ヲ信ズ信ハ一而
已之ヲ信ズルニ遲速アルナリ此時ニ方リ宗教ハ世運ノ進歩ヲ助ケ智
力的ノ宗教タルベキニ至ル是ニ於テ宗教ノ根本ヲ確定スベキト必セ
リ其根本ハ即「神」ナリ若宗教ニシテ無神教タランカ即一種ノ哲學ノミ
安心立命ノ働ヲナスモノニアラズ神明ヲ敬信スルヲ以テ宗教タルヲ
得ルナリ然而ソ昔日ハ神ノ存在ヲ認知スルニ敢テ存在セル理由ヲ問
ハズシテ之ヲ敬信セリ今日ハ實驗ノ世ナリ其理由ヲ問フテ後ニ信ズ
ルナリ故ニ宗教モ亦神明ノ存在スル理由ヲ説明シテ之ヲ示スニ在ル

ナリ若之ヲ説明セサルキハ世人ハ之ヲ卑視嘲笑スルノミ、

第二十五節 神ノ存在ヲ説明スルニ方テ輒モスレハ左ノ攻撃ヲ受ケ
又宗教家ニ不愉快ヲ與フルトモアラン曰ク神ノ存在ハ常理ヲ以テ測
リ知ルベカラザルモノナリ之ヲ測知セントスレバ無益ナリ神徳ヲ蔑
如スルモノナリ曰ク神ノ存在ヲ議スルハ神ヲ無ニスルモノナリト此
ノ如キ言ヲナスモノハ淺智短識固ヨリ言フニ足ラズ夫レ天地間ニ神
明アルハ万古誣フベカラズ之ヲ理學上ヨリ研究シ其存在ヲ確認シ之
ヲ敬信スル固ヨリ至當ノト云フベシ夫レ無ヲ無トシ有ヲ有トスル
ハ論理學ノ原則ナリ若夫神明ノナキニ吾人之ヲ假設スルハ論理ノ原
則ニ戻ルモノト云フベキナリ万古神明ノ存スルアリ吾人之ヲ有リト
論ズ何ソ神徳ヲ蔑如スルト之有ラン

第二十六節 神ノ存在ヲ研究スルニハ之ヲ哲學ニ於テセザルベカラ

ズ宗教ハ哲學ノ應用部タルヲ既ニ之ヲ述ヘタリ而宗教ノ基礎タル神
 明ノ存在ヲ研究スルニ至テハ哲學宗教茲ニ合躰一ノ哲學ヲ生ス之ヲ
 神學ト云フ英語「シオロヂ」ト云フ即「神ノ存在性質及神ノ法則支配人
 ノ之ニ從順シ神ニ盡ス義務等ヲ研究スル學問ナリ」
 第二十七節 然ルニ歐洲ノ神學ハ中世耶蘇教會及煩瑣學派ノ創スル
 所ニシテ哲學ニ依ル「アルモ中世ヲ通シテ僧侶ノ專習スル處ナリシ
 カ近世哲學ノ進ムニ從テ其學勢ヲ減スルノ傾キアリ然レモ今日ト雖
 尙其學科ノ地位ハ哲學ノ上ニ占メ儼然勢力ヲ有セリ一千八百八十五
 年獨逸帝國大學生徒ノ統計表ヲ左ニ掲ケ神學ノ勢力ヲ有スル一班ヲ
 示サン

合計數ヲ出ス

千八百八十五年	神學生	法學生	醫學生	理文學生
---------	-----	-----	-----	------

獨逸帝國大學

五五四九

五二六八

七九三四

八六二

生徒總計二万七千三百〇八人ニシテ神學生ハ五千五百四十九人即二
 割二分程ヲ有ス内伯林大學ニテハ神學生六百人ライプツヒ大學ニテ
 ハ六百九十九人之ヲ最多シトス盛ナリト謂フベシ我邦ハ學術固ヨリ
 獨逸ト比スベキニアラズ但其數ヲ示シテ彼ニ及ハサルヲ示サン

正科撰
科合計

明治二十二年

文科生

理科生

法科生

醫科生

工科生

帝國大學

四十五人

三十六人

三百七十七人

二百四十三人

九十一人

本邦固ヨリ神學ノ設立ナシ而其哲學ヲ修ムルモノ僅々二十四人之ヲ
 獨逸ニ比シテ如何シヤ

第二十八節 西洋ノ神學ハ漸々其勢力ヲ亡フ傾キアリ而之ヲ我東方
 ニ起サントスル抑亦愚ナラズヤ曰是大ニ然ラサルナリ既ニ言フ如ク
 其神學ナルモノハ基督教會ノ專ラ研究セシ處ニシテ哲學ノ進歩スル

ニ從テ相背馳スル點アルニ至リシナリ而神ノ存在ニシテ万古誣フベカラザル以上ハ神學ノ勢力ヲ亡フ所以ナシ尙進歩スベキヲ期スベキ而已是ニ至テ歐洲哲學者有神說ニ關スル一斑ヲ叙セシ

第二十九節 哲學ハ万有ノ原理ヲ統合シテ一ニ歸セシムルモノナリ其統一ニシテ一ノ太極ヲ立ツ天下ノ事物森羅万象生滅隱顯スト雖一ノ太極ヨリ發スルモノヲラズンハアラズ而其太極ニ至テハ學者各見ル處ヲ異ニス是ニ於テ唯物唯心一元二元三元等立ルニ至ル然レモ其要ハ唯物唯心ノ二派而已唯物家ハ天地万有ノ理ヲ物質ノ一元ニ歸スルモノニシテ固ヨリ天神ノ存在等ヲ研究セズト雖物質ノ運動スル所以ニ至テ物質ニ歸セズシテ之ヲ「力」ニ歸ス物之與力不相離トハ唯物家ノ原則ナリ而其力ナルモノハ無形無象ニシテ到底物質家ノ研究スル所ニアラザルナリ

第三十節 唯物家ハ物質ノ一元ニ偏シ到底萬有ノ原因ヲ解釋スル能ハザルナリ之ヲ唯心論ニ比スレハ淺薄タルヲ免レス佛國英國ニ之ヲ唱フル者多キ偶然ニアラザルナリ然レモ古今ノ哲學ヲ見ルニ其論理ノ窮極スル處ハ大概之ヲ天神ニ歸セサルハナシソクラチース「プラト」ノ如キ天神ヲ敬シ其存立ヲ信ズルニアラズヤ「プラト」ノ一神說ハ基督敎ニ好基礎ヲ與ヘタルニアラズヤ近世哲學ノ祖ト仰ク「デカート」ノ如キハ「吾ハ思フ故ニ吾ハ在リ」ト云ヒ其思想ハ天賦ニテ存スルモノアリ只万能ノ上帝ガ直ニ吾人ニ賦與シタルモノトセリ其他「スピノザ」ノ「本質」「ライブニツク」ノ「元子」「カント」氏ノ「主觀」「ヘーゲル」氏ノ「絶對」等其名ハ異ナリト雖之ヲ神ナリトシテ不可ナルナシ其易ノ太極孔子ノ「天」ヲ唱ヘ釋氏ノ真如只命名ノ異ル而已皆物質家ノ言フ如キ物ニアラズシテ一ノ靈機タルナリ

第三十一節 之ヲ要スルニ万有ノ原理ヲ物質ノ一元ニ歸スル哲學者ハ甚少數ニ屬セリ之ヲ物質ニ歸スルモ其局ヲ結ブテ得ズ是ニ於テ有神論ニ入ラザルモノハ終ニ「ロツク」ノ經驗說「ヒューム」ノ虛無說ニ陷ルベシ物理學者ナル「ハクスレイ」ノ言ハズヤ世界ニハ物質運動及ビ必然ノ勢力ノ外何物モ存在セズト云フハ天下空論中ノ更ニ空ナルモノナリト善キ哉言乎泰西物理學者ハ物質ヲ研究スルモノナリ而獨リ「ハクスレイ」ノミナラズ「タル井」ノ進化說ヲ唱フ而頗ル神ヲ敬スト其他神ノ存在ヲ信スルモノ甚多シ「スペンサー」ハ進化說ヲ社會現象ノ上ニ應用シテ進化哲學ヲ立ツ而尙宗教ヲ以テ不可思議界ニ屬セシメ氏ハ此不可思議界ヲ信スルニアラズヤ若夫レ神ノ存在ヲ疑テ無神論ヲ立テント欲セハ「ス」氏ノ門弟トナリ不可思議界ヲ崇拜スベキ而已神ヲ敬セズ不可思議界ヲモ信ゼズンバ眞ノ愚人ノミ癡人ノミ

第三十二節 以上數節ハ神ノ存在ヲ論スルニ非ズシテ古來哲學者カ神ノ存在ヲ旨定シ之ヲ敬セシテ言フナリ古來ヨリ哲學ノ進歩ハ多數ノ賢哲ヲ埃テ非常ノ功ヲ奏セリト雖其窮極天神ノ存在スル事實ニ至テハ千百年ノ久シキ一而已其間少數ノ無神論者ガ之ヲ疑フアルノミ既ニ天神ノ儼然存在スル以上ハ少數ノ無神論者之ヲ疑フモ何ソ益アラソ而古今哲學者ガ其窮極ヲ天神ヲ歸スルハ(一)天地万有ノ原因ヲ尋テ(二)物心關係ヲ究メ(三)良心ノ存在智識ノ發達腦髓ノ奇シキヲ研究スルニ之ヲ天神ニ歸スル外解說ノ方ナキハ哲學史上示ス事實ナリ「デカ」ト「ハ物心二者ノ關係ハ天神ノ媒介ニ由ルト」說キ「カント」氏曰良心ハ上帝ノ存在ヲ見ハスモノナリト

第三十三節 古今ノ哲學其窮極ヲ有神論ニ歸シ宗教ノ目的ト相合スレバ神學ナルモノ、廢棄スルコトナキハ必然ナリ然ルニ歐洲ノ神學ハ

中世僧侶ノ研究セシ迹ヲ繼クモノニシテ哲學ノ進歩ニ後ル、形勢ナリ是ニ於テ勤メテ相合セントスルモ基督教ノ根本タル三位一體神子聖靈ノ說等ヲ改ムルヲ能ハサレバ哲學ト一致スルヲ易キニアラズ既ニ「ユニウスクリル」ユニテリヤン派ノ如キ一新ノ教義出ルモ教中ノ風許之ヲ斥クルガ如キアルヲ見テ知ルベシ

第三十四節 今ヤ此章ヲ結テ並セテ第一章ヨリ本章迄ヲ以テ一段ヲナスベシ有神論ハ神德ヲ蔑如スルモノニアラズ到底解釋スベカラザルヲナシテ無益ノ勞ヲ取ルモノニアラズ神ノ存在ヲ確定シ儼然神德ヲ明カニスルモノナリ今日實驗ヲ尙フ時代ニ達シ神ノ存在ヲ確定シ神德ヲ明カニセズンバ人ノ之ヲ信ズルナキニ至リ宗教ノ基本茲ニ頽レン宗教頽レテ社會ハ暗黒ト變ズルノミ然ラバ神ノ存在ヲ確定シ性質方則等ヲ研究スルニハ天地万有ノ原因良心道德心靈ノ働物心ノ

關係等哲學上之ヲ研究スルノ後其目的ヲ達スベキナリ是宗教哲學關係ヲ概説スルニ止ルト雖宗教家タルモノ必哲學ヲ講究セザルベカラザル所以ノ理由ハ既ニ判然タルベシ

第五章 神道教ト國學トノ關係

第三十五節 第一章ヨリ前四章ニ至ルノ間ハ專ラ宗教ノ性質將來等ヲ汎論シタルニ止ル是ニ至テ我神道教ヲ振興スル私見ヲ述ヘントス但後章逐次論述スル所皆前四章ニ述ブル所ヲ以テ標準トシテ之ヲ論スルナリ

第三十六節 神道ノ教ニシテ世益ヲ爲スニ足ラズトセバ吾人之ガ振興ヲ冀圖スルハ愚ノ至リト云フベシ然レモ余輩ハ神道ノ教ハ世益ヲナシ國家ヲ維持スルニ足り他日完美極點ノ良教タルベキヲ信ズルヲ以テ一身ヲ投シテ之カ振興ニ從事セントスルナリ然ルニ現今世人ガ

神道ヲ曰スルニ卑野トナシ或ハ宗教ノ精神ヲ有セズ安心立命ノ働ヲ
缺クト此等ノ評論ハ吾人我本教ノ尊キヲ示ササルノ過ニシテ奮テ之
ヲ示シ以テ良教ナリト世人ノ許スニ至ルヲ求メサルベカラズ然レモ
現今世人ノ卑野ナリトシ或ハ宗教ノ精神ヲ有セストナスハ明ニ左ノ
二件ニ坐ス

- (一) 單ニ祈禱禁厭ヲナス講社ヲ見テ神道教ノ本色ト見ルニヨル
- (二) 國學ト神道教トヲ混同セルニヨル

其第一點ハ神道ノ基礎ニシテ定マル以上ハ教會ノ組織ヲ正シテ之ヲ
改良スルニアルヲ以テ今之ガ方案ヲ述フルニ及ハス第二點ニ至リテ
ハ充分之ヲ陳述セザルヲ得ズ

第三十七節 國學者ノ中又神道教師ノ中ニテモ尙國學ト神道トヲ混
同シテ今ニ此區別ヲ立ルヲ見ズ是我本教ヲ衰弱セシムルノ媒トナル

ノミ我本教ヲ振興シテ他日之ヲ宇内最良ノ教タラシメント欲セハ今
日ニシテ宜シク國學ト分離セシメ全ク宗教トナスニアリ而國學ト分
離スルトハ其關係ヲ絶ツノ謂ヒニアラズシテ之ヲ區別スルヲ謂フナ
リ神道教ト國學トノ關係ハ増々密ニセザルベカラズ讀者乞フ次節ヲ
玩味シ前章ノ意ヲ取り余ガ論ノ在ル處ヲ了センコトヲ

第三十八節 國學ト神道教トノ區別ヲ立ルニ先チ國學ノ性質ヲ述ベ
ン國學ハ古典ヲ解シ國史ヲ研究シ國語及令律制度ヲ研究スルノ學ナ
リ徳川氏ノ時ニ至リ林家ニ和學科ヲ置ク是國學ノ濫觴ナリ契仲眞淵
ノ二翁ヲ經テ我本居翁ニ至リ古言ヲ解釋シ古事記ヲ尙ヒ其傳ヲ述ブ
ルニ至ル平田翁ノ之カ後ヲナスアリ其間令律格式ヲ校スルモノアリ
源語勢語万葉ヲ解スルモノアリ千歳ノ下ニ古典國史國語制度明カニ
ナルヲ得タリ諸氏ノ功大ナリ偉ナリ而是皆一ノ學問ニシテ安心立命

ノ訣ヲ授クルニアラズ信徒ヲ結集シテ導キシニアラズ今此國學ヲ以テ神道教ナリトセバ神道教ハ一ノ學問トナリ宗教タルノ資格ヲ失フモノナリ一ノ學問トシテ足レリトセハ國家ニ必要ナル宗教ハ何ノ教ヲ取ランカ儒ヲ用ヒンカ佛ヲ用ヒンカ基督ヲ用ヒンカ固ヨリ國家ニ益アラハ何教ヲ用フト雖可ナリ而我國家ヲ維持シ世益ヲナスノ資料我本教ニ存スル以上ハ外來ノ教ニヨラズシテ固有ノ教ニ依ルヲ得策ナリトスルハ賢者ヲ埃タズシテ知ルベキナリ

第三十九節 我本教ハ未ダ國學ト區別ヲ立テズ純全タル宗教ノ形ヲ有セザルヲ以テ之ヲ國學トシテ一ノ學科トナスハ得策ニアラズ之ヲ宗教トナスヲ以テ得策トスルナリ現今國學ハ上一般ニ其研究ノ必要ヲ感ズルニ至リ帝國大學文科ニ和文學科國史科ノ生徒ヲ養ヒ皇典講究所ハ其規模ヲ擴張ス且和文假名遣等ノ學科ハ將ニ小學ノ科程中

ニモ加ハラントスルニ至ル政府モ之ヲ獎勵スルノ傾キアレバ國學ノ振興スルハ期シテ埃ツベキナリ國學振興スト雖皆政治法律經濟哲學等其専門ノ學科ヲ研究スルノ緒餘ニ修ムルモノニシテ之ヲ専門トスルモノハ或ハ鮮ク只之ヲ參考トスルニ止マルハ蓋時勢上止ヲ得ザルナリ國學ヲ修ムルハ只其參考ニ止マルトセハ國學振興スルハ神道ノ教ヲ振興セリト云フベカラザルハ見易キノ理ナリ

第四十節 然ラハ神道教ハ國學ト區別ヲ立テ之ヲ組織セサルベカラズ之ヲ組織スル如何カン古典即記紀二書其他祝詞万葉集ノ和歌中ニ神人ノ間ニ發スル訓戒神人ノ關係ニ付テ神語靈魂等ニ付テノ思想其他祭神祈禱神祓鎮魂等ノ事班々點出ス今之ヲ摺摭セザルキハ他日他教者ノ取ルトコロトナラン宜シク今日ニ當リ國學中ヨリ其等ノ事項ヲ採萃シテ之ヲ神道教ノ基礎トナシ以テ我本教ヲ組織セザルベカラ

ズ
 第四十一節 世人ガ神道教ヲ目シテ不完全ノ宗教ナリ其効ヲ欠クト
 ナスハ神道教ガ國學ト混同シテアル有様ヲ見テ言フナリ神道ガ漸ク
 宗教ノ形ヲ具スルニ至リタルハ近來ノ事ナリ八教特立ノ認可ハ明治
 十四年ニ出テシニアラズヤ我本教ハ實ニ草創ニ屬セリ世界最新ノ宗
 教ニ屬セリ事草創ニ屬シ教具未備ハラズ教師未多カラズ是形狀ヲ目
 シテ不完全ノ宗教ナリトナスハ抑事ヲ解セザルニ依ル教外漢ノ事ヲ
 解セザルハ怪ムニ足ラズト雖教内ノ士ニシテ時ニ嘆息ノ聲ヲ發スル
 モノアリ曰神道ハ衰ヘタリ地ニ墜チタリト余輩此言ヲ聞テ甚ク解セ
 ザルナリ夫事草創ニ屬シ未タ完備セズ而之ヲ嘆シテ地ニ墜チタリ衰
 ヘタリト云フハ抑何ソヤ蓋シ嘆者ハ神道教ヲ以テ古來ヨリ存在セル
 モノト思フニ依ル古來ヨリ存在セルモノハ國學ナリ神道ノ教理ナリ

之ヲ一派ノ教ニ組織セシハ抑近來ノ事ニアラズヤ宜シク銳意奮進之
 テ完美ノ宗教タラシムルヲ勉ムベシ且ツ人ハ喜悅進步ノ情内ニ充
 テ而事ヲナスト失望退縮ノ念ヲ以テナスト孰レカ能ク之ヲ成スルヲ
 得ルヤ失望ノ念ヲ以テナヒバ必ズ壞ル喜悅ノ情ヲ以テナヒハ必成ル
 今我本教ニ從事スルノ諸君ヨリ失望ノ念ヲ絶チ嘆息ノ聲ヲ發スルト勿
 レ年々歳々漸ク教義ノ熟スルヲ見テ喜悅ノ情ヲ發シテ奮進布教ニ從
 事セラレヨ

第四十二節 今神道教ヲ國學ト區別スト雖神道ノ教旨大原ハ悉ク國
 學ノ中ニ存在ス神道者タルモノハ必國學者タラザルベカラズ而國學
 者タルモノ必ス神道者タルニアラザルナリ國學中ニ存在含蓄スル教
 旨大原ハ文明ニ背馳シ世益ヲナサズトセハ之ニ依テ神道教ヲ組織ス
 ルハ不可ナリ然ルニ余ハ之ヲ目シテ完美極點ノ良教トナルベキヲ信

スルナリ尙次章ニ説明スル所アラントス
 第四十三節 神道教ハ近來ニ至リ宗教ノ形ヲ具スト云フト雖今日ニ
 至リ遽ニ備シタルニアラズ遠ク神代ノ昔ヨリ宗教ノ分子ヲ生シ之ヲ
 今日ニ傳ヘタルナリ即天祖ノ遺訓伊弉岐神ノ神祕大國主命ノ經營皇
 祖ノ祭神歷朝ノ崇神追遠申孝ノ祭政等皆宗教分子ヲ胚胎シ今日迄傳
 ヘタルナリ且中世以來宗教的ニ用ヒシモノナキニアラス即空海吉田
 家及度會延佳山崎闇齋加茂規清等幾分力之ヲ宗教的ニ利用セシナリ
 而之ヲ不完全ナカラ宗教ノ形狀ヲ具セシハ黒住氏アリ石田氏アリ普
 寬覺明彌祿等ノ先輩アリトモ皆少家數ナリ只禊教ノ祖井上氏ニ至テ
 ハ學徳共ニ秀テ其遺書ヲ讀ミ其遺蹟ヲ考フルニ儼然一教ノ開祖タル
 ニ足ル且其教旨訓戒ノ世ヲ益スルニ足ルヲ以テ後世神道ノ士之ヲ仰
 テ祖トナスベキナリ殊ニ我大成教ハ禊教ヲ主トスルヲ以テ教師諸君

カ先師ノ意ヲ繼キ禊教ノ教理ヲ今日ノ學理ニ適合セシメ之ヲ振鐸ス
 ルニ在リ余ハ國學ニ於テハ固ヨリ本居平田二翁ニ私淑スト雖神道ノ
 教旨ニ於テハ古今茫々井上正鐵靈神ノ一ニ私淑スルノミ余嘗禊業ヲ
 修シテ七絶ヲ得タリ

一念修成萬慮無。晚風涼處氣初蘇。霽空萬里眞如月。照得冰心在玉壺。
 今附記禊教社中諸彦ノ一粲ヲ博ス

第四十四節 乞フ我教師諸君ヨ古典ノ講義ノミヲ以テ足レリトスル
 勿レ宗教ノ國家ニ必要ナル所以ハ前章ニ於テ了セラレシナラン我帝
 國ヲ獨立富強ナラシムル基礎ハ神道教ヲ以テ人心ヲ固結シ民ヲシテ
 永ク社會ノ良民タラシムルニアルヲ以テ神道ヲ國學ト混シ之ヲ一ノ
 學科トスルヲ勿レ之ヲ一ノ宗教トナサシメヨ我本教ノ基礎是ニ在テ
 彼ニ在ラズ前章宗教ヲ汎論シ來ルモ一ニ論ヲ是ニ結ハンガ爲メナリ

乞フ玩味アラノコト

第六章 神道教ト哲學トノ關係

第四十五節 既ニ神道教ヲ以テ宗教タラシムルニ於テハ本章標目ニ示サル問題ヲ解釋スルト至當ナリトス神道ヤ卑野ニシテ哲學ノ應用部タルト能ハズトセハ之ヲ宗教タラシムル頗ル困難ナルノミナラズ徒勞ナリト云フベシ然レモ余ハ篤ク神道教ガ哲學ノ應用部タル十分ノ資格アルヲ信ズルヲ以テ此章ニ於テ聊之ヲ說述セントス

第四十六節 我本教ノ教旨如何我本教ハ開基ノ教祖出テ教旨ヲ組織セシモノナシ世人或ハ我本教ヲ目シテ神道教ハ教祖ノアルトナク從テ其教不完全ナリト何ゾ知ラン教祖ノ出ルアルハ殊ニ社會ガ其必要ヲ感シ之ヲ出スニ在リ未其必要ナキニ教祖ノ出ルコトアルナシ孔子ノ出ル釋迦牟尼佛ノ現ル基督マホメッドノ起ル豈偶然ナランヤ周道衰ヘ

孔子出ツ波羅門ノ教理雜駁歸スルナキニ至リ釋迦現ル猶太教ノ腐敗スルヤ耶蘇教起ル皆類ヲ推シテ知ルベシ我日本國ノ如キハ上代ヨリ君子國ノ稱アルガ如ク社會ノ混亂道德ノ腐敗教祖ヲ出シテ万世ノ德教ヲ表示スルガ如キ必要ナキヲ以テナリ

第四十七節 然ハ則教祖出ズ教ナキカ曰然ラザルナリ教ナルモノハ教祖ヲ埃テ出ルモノニアラズ教祖ニ依テ現ル、モノナリ先天ニ存スルモノナリ夫レ哲學ノ原理ガ哲學者ニ依テ出ルモノニアラズ哲學者ガ之ヲ示ニ止ルナリ原因結果ノ理物心關係ノ法時間空間ノ存在等皆哲學者ノ創起セルモノニアラズ哲學者其原理ヲ發見セシニ止マルナリ其哲學者ノ出ル希臘ノ「テールス」ヲ以テ其開始トナス夫「テールス」ハ万物ノ本原ヲ水トナセリ「テールス」ノ天地開闢ニ後ルコト幾万年万物ノ本源ハ開闢ノ時ヨリ定マル只「テールス」ガ幾万年ノ後ニ漸ク之ヲ研究

セシニ止ル「テールス」が其本源ヲ作りシニ非ルナリ其宗教ハ哲學ノ應用部タルヲ既ニ之ヲ論ゼリ哲學ノ原理ニシテ先天ニ存ストセハ宗教タルモノ亦先天ニ存スルハ讀者ノ了セシヲナラン

第四十八節 我神道教ハ教祖出ズト雖其教理ハ天地開闢以來神人ノ間ニ言依シ給ヒテ傳ハレリ即只一ノ神語アルノミ即神ながら「ナル」一語而已此一語ニテ足レル而已未タ家ニ不孝ノ子アラズ別ニ孝道ヲ教フルニ及バズ未タ國ニ不忠ノ臣アラズ忠義ヲ教フルニ及ハザルナリ未タ殘忍ノ行暴戾ノ樂ヲナスモノアラズ慈愛公平ノ道ヲ教フルニ及バザルナリ（武烈天皇ノ御行狀ノ如キハ遠江ノ内）神ながら「ナル」語ハ何人ノ言ヒ出シヲ知ルニ由ナク恐クハ上古以來神人ノ間ニ存シ來ル語ニシテ之ヲ神語トナスノ適當ナルヲ知ル而始メテ之ヲ孝徳天皇ノ詔ニ初メテ惟神ノ字ヲ見ル本註ニ惟神ノ字ヲ解シテ曰ク惟神者謂隨神道亦自

有神道也ト見ユ即神ノ隨ト云フ義ニシテ我本教ノ根原是ニ出ツ

第四十九節 其上世我國ハ「言舉セヌ國」ト云フ万事万端其理由ヲ附シテ言舉セザリシナリ故テ以テ仁義忠孝等總テ言舉セザリシ只神ノ道ニ從フベシト一語ニテ經緯シ來ル而神ノ道トハ天地方有及人生日常ノ間ニ働キ運動スル所ノ自然ノ方則ヲ云フナリ本居宜長カ直毘ノ靈ニ古の大御世に「道」といふ言舉もさらにあかりき其のたゞ物もゆく道こそ有りけれ物のことわりあるべきすべ萬の教へことさしも何の道くれの道といふの異國のさびなりト論セシハ頗ル卓越新發揮ノ論ニシテ上來余カ論セシ處ト相同シ其次段ニアル説ヲ以テ頗ル要トス「そも」此天地のあひだも有とある事の悉皆も神の御心ある中も云々ト説キシ云々以下ヲ切斷シ之ヲ結フハ則天地方有ノ働ハ神ノ御心ノ中ニ在リト論定スルヲ得ベシ此論定ヨリ進ンテ之ヲ哲學上ニ

及ボスキハ天地万有ノ生滅起伏スル人間塵事ノ變化錯雜ナル自然ノ
 働ハ有規聯絡ニレテ皆神ノ御心ノ中ニ在リト結スルヲ得ベシ
 第五十節 天地万有ノ働人間塵事ノ變自然ノ理ニ約セラルモノトス
 此自然ノ理ヲ研究シ其運動ノ起滅變化向背情態ヲ推測スル學問ヲ哲
 學トス哲學ハ此自然ノ理ヲ研究スルヲ以テ百科理學ノ王タルナリ百
 科理學ニ於テハ動物學ハ動物法律學ハ法律等其一科ノ理ヲ研究スル
 モノナリ哲學ハ其一科一科ノ理ヲ總轄シ之ヲ絶對ノ原理ニ歸着スル
 ナリ哲學ノ起ルヤ自然ノ理法ヲ開示シテ人々之ニ逆フナク之ニ從
 テ幸福ヲ享ケシメントスルニ外ナラズ然レモ哲學ハ之ヲ開示スル迄
 ニ止リ之ニ從ハシムルノ効力ヲ欠クトハ前數章ニ於テ論セシガ如シ
 之ガ應用部トシテ宗教起ル而如何ヒン宗教ハ哲學ノ進歩ト伴ハズ哲
 學獨リ進ムノ傾アルハ今日歐洲ニ於テ見ル如此所以ハ宗教ノ組織ヲ

改良セザルニヨル之ヲ改良スルヲ能ハザルハ一ニ其教祖ノ教理ヲ維
 持センガ爲ニ出ヅルナリ而我神道教ハ此弊ヲ免ルヲ以テ能ク哲學ノ
 應用部タルニ適スルナリ

第五十一節 我神道教ハ儒佛基督敎ノ如キ仁義禮智信或ハ慈愛公平
 若クハ五戒八戒十戒五百戒其他「モセス」ノ十戒ノ如キ各個ニ亘リ邊隅
 ニ踟躑シタル訓戒教旨ヲ立テザルナリ若夫假ニ十戒中ノ一戒ガ天地
 自然ノ理法ニ背クトヒンニ教祖以來傳續シ來ル十戒ハ變改スルヲ能
 ハザルヤ必矣故ニ邊隅ニ踟躑シテ教旨教律ヲ立テタル宗教ハ後世哲
 學ノ進歩シテ自然ノ理法發見セラルニ伴テ到底其應用部タルヲ得
 ザルノ恐アリ

第五十二節 我神道教ハ前節ノ如キモノニアラズ其教理廣大厚博盤
 古ニ現レ悠久ニ傳ハリ日月ノ照ス處霜露ノ墮ル所凡ソ血氣アルモノ

尊信セズンバアル可カラザルナリ特リ我本教ノ信徒ノミニアラザルナリ人其此言ヲ以テ虚トナサン歟乞フ惟神ノ一語ヲ味ヘヨ惟神トハ神ノ道ニ随フコシテ天地万有人間一切其變化運動ノ自然ノ理法ハ皆神ノ道ナリ神ノ道ニ随フトハ自然ノ理法ニ從フノ謂ヒ而已自然ノ理法ハ哲學ニ依テ明示サル、ナリ即惟神トハ哲學ノ明示スル處ノ自然ノ理法ニ逆フコナク之ニ隨ヒ行ケト云フ義ナリ

第五十三節 其神道ノ教タル邊隅一部分ノ教ニアラス廣大ナル教ナリ哲學進步自然ノ理法ヲ發見シ來ルニ際シ人ヲシテ之ニ順ナラシメントスルニハ我神道教ヲ措テ他ニ其教アル歟天下古今教旨ヲ立ルモノ多シ未タ我神道教ノ如キ廣大ノ教理ヲ垂ンテ自然ノ理法ニ隨ヘト教フルモノアラザルナリ嗚呼各種ノ宗教ハ人造ニ屬ス瞿曇氏ノ教廣大幽微ヲ極ムト雖寧ロ哲學部ニ屬シ真正ノ宗教タル分子ヲ欠クノ憾

アリ真正ノ宗教トハ我神道教ノミ我神道教ハ純粹ノ天啓教ナリ耶穌ノ徒其天啓ニ誇ルト雖彼十戒ノ如キ之ヲ天啓トナスハ甚價値ナシ只我惟神ノ一語而已天啓ニ出ルト謂フベキナリ

第五十四節 上來ノ所論ニ依リ我神道教ハ哲學ノ應用部タルニ適スルコトヲ知ルニ足ラン哲學ノ進步ニ從テ之ニ伴フモノハ我神道教アルノミ天下宗教ノ前途ハ既ニ第三章ニ之ヲ論述シ智力的ノモノトナリ眞實无妄ノ教旨タルベキヲ肯定ス我神道教ハ荒唐無稽ノ談ヲ説クニアラズ古典ニアル天地創造ノ傳説ハ國學ニ於テ考究スベキ問題ナリ我神道教ニ關係アルナシ我神道教ハ眞實无妄只一ノ惟神ノ神語アル而已豈崇カラズヤ

第七章 神道教ノ前途

第五十五節 我本教ノ教旨ハ前途更ニ改良ヲ要セザルナリ惟神ノ教

旨万世ニ亘リテ磨スベカラズ聖人復起ルモ易フベカラザルナリ而シテ其改良スベキ點ハ一ニ布教ノ方法ニ在リテ彼ニアラザルナリ其我本教ハ草創ニ屬シ教具未ダ備ハラズ教師其人ニ乏シキハ我神道教中ノ上下共ニ憂フル所ナリ孔子曰文武之政布在方策其人存則其政舉其人亡則其政息ト善政良法モ其人ニ依テ舉ゲラル其人亡スレバ徒政空法ノミ我神道教ノ廣大ナル完美ノ良教タル性質ヲ備フルニモ拘ラズ發揮其人ナク傳道其師ナクンバ虛教ノミ何ソ尊ブニ足ランヤ

第五十六節 余ハ神道教師諸君ニ望ム諸君ハ我本教ノ前途ヲ如何セントスルヤ世界ノ良教タル神道ニ從事スル以上ハ宜シク銳意奮進之ヲ發揮シ之ヲ傳ヘ只我帝國內ニ其教光ヲ照スノミナラズ之ヲ海外ニ及ボシ幾億ノ生民ヲ救濟セントテ志スベシ嗚呼任重クシテ路遠シ是ニ於テ余ハ諸君ニ冀望スル處ハ左ノ二點ニアリ

(一) 哲學及百科理學ヲ研究スル

(二) 教會組織制度其他布教ノ方法ヲ改新スル

第二點ハ之ヲ第九章ニ於テ陳述スベキヲ期シ今其第一點ニ付テハ此章ニ於テ論述スベキナリ

第五十七節 我本教ハ諸君ガ其躰面ヲ失墜セズシテ之ヲ扶植スル以上ハ他日世界一般ガ奉信スル良教タルベキモノナリ哲學ハ今日進歩ノ極ニ達セシニアラズ近世哲學ニ於テハ獨逸ニ「カント」「ヘーゲル」ノ二大家アルノミ今日英ニスペンセル「獨逸ニ「ハルトマン」ノ二氏アルニ止ル其進歩ヤ數學物理學ノ如キト比スレバ殆ンド老牛ノ歩ニ似タリ而其進歩ノ形迹ハ掩フベカラズ向後進一進其極處ハ他日幾万年ノ後ニアルヤ知ルベカラズ今ニシテ天地間事物ノ説明シ得ザルモノ勝テ數フベカラズ理法ノ發見シ得ザルモノ其幾個ナルヲ知ラザルベシ而之ニ

伴フヲ得ルモノハ獨リ我本教ナル所以ハ既ニ論ゼリ然レモ我本教ニ從事スル士ガ哲學ノ明示スル事理ヲ解スルノ明ナク又ハ一ニ哲學者未完ノ理ヲ信シテ神法ナリト思惟シ或ハ哲理ヲ排シテ執ラザルガ如キアラバ哲學ノ應用部タルモノト言フベカラズ我本教ノ前途ハ愈々然ルニ如此タルヲ得ザルハ以テ我本教ヲ衰ヘシムルモノナリ

第五十八節 故ニ我教師諸君ハ先ツ哲學ヲ學ブテ以テ至急ノ事項ナリトス哲學固一端ニアラズ印度ニ本クモノアリ支那ニ本クモノアリ佛教及伊洛ノ學說ハ尤參考スルヲ要ス哲學ハ英獨佛三國ニ本クモノ、中其好ム處ヲ密究スルヲ可トナス哲學ニ屬シテ論理學心理學社會學倫理學等ハ尤研究スベキ必要アリトス教規戒律ヲ立ツルニハ以上諸學科ノ許ス處ニ依テナサザルベカラズ其許サザル所ハ哲學ト背反

スル點ナリ爰ニ注意セザルベカラズ

第五十九節 哲學ヲ研究スレバ勢百科理學ニ涉ラザル可ラズ百科理學ニ涉リ其間ニ存スル天然ノ理法即我が謂フ所ノ神ノ道ナルモノヲ認ムベシ若夫如此ナルヲクシハ万事ニ應シテ之ヲ活用ヒシムルヲ能ハザルナリ我本教ノ前途ヤ遠シ大ナリ我教師諸君ヨ哲學ト百科理學トヲ研究スルヲ忽ニスル勿レ時ニ殖産興業ニ關シテ說教スルヲアラソカ經濟學ニ賴ラザルベカラズ衛生ニ關シテ說教スルヲアラソカ醫學生理學等ニ賴ラザルベカラズ天變地異ニ際シテ說教スルヲアリトセンカ天文學象學地質學等ニ出入セザルベカラズ或ハ徵兵ヲ獎勵スルヲアラソク或ハ法律規則ニ順從テ說論スルヲアラソク政治學國家學ニ關係スルナリ凡ソ如此我本教カ其應用部トナリテ天下ノ万事ニ應シテ人心ヲ右左セントスルニ當リ教師タルモノ百科理學ノ智識ヲ

欠クキハ偶説教シテ徒ニ嘲笑ヲ博スルニ過キザルノ恐レアリ
 第六十節 我本教ノ教師ニシテ哲學及百物理學ノ智識ヲ欠クキハ偶
 以テ我本教ノ軀面ヲ失墜スルニ足ル惟神ノ大教ハ虛教ノミ實ニ虛教
 ノミタルニ止マラズ人之ヲ卑視シ遂ニ之ヲ亡フニ至ラン固ヨリ惟神
 ノ教旨ハ敢テ教師ノ如何ニ依ラズ悠久存在スベシト雖之ヲ一派ノ教
 トシテハ之ヲ亡フニ至ラン今ヤ神道ハ漸ク一派ノ教タルノ秋ニ達シ
 其機熟セントスルニ至ル他日之ヲ亡フハ豈遺憾ナラズヤ而之ヲ完美
 極點ノ良教トナスニ至テハ國家ヲ益シ人生ヲ妙境樂地ニ導ク其益大
 ナルベシ况ンヤ之ヲ海外ニ傳教スルニ至テハ國家ノ令譽之ニ過クル
 ナシ嗚呼吾人今日ニ生レ此ニ從事スルヲ得ハ幸ナリ諸君ヨリ奮ヘヨヤ
 起ヨヤ國家ノ爲自己名譽ノ爲豈爲サバルナカラシヤ

第八章 神道教ト國家トノ關係

第六十一節 我神道教ノ教旨ヤ廣大無邊實ニ之ヲ我帝國ノ宗教メ
 ニ止マラズ万國ニ涉リテ之ヲ擴充スルニ足ル性質ヲ有セリ吾人宜此
 性質ヲ發揮シテ之ヲ良教トシ以テ他日之ヲ海外ニ布教セントスルノ
 大志ヲ抱懷スベキナリ殊ニ我帝國ハ國體組織ノ點ヨリ之ヲ熟看スレ
 バ神道教ヲ利用シテ國體ヲ發揮堅固ニスベク之ニ依ラズ或ハ其危ニ
 近ヅカントスルノ恐アルヲ以テ國體維持ノ點ヨリ布教傳道ニ盡力セ
 ザルベカラズタトヒ之ヲ良教トナシ海外ニ布教スル能ハサルモ我國
 軀ヲ維持シ旭章ノ旗ヲ東海ノ天ニ閃耀セシメンガ爲ニ盡スベキナリ
 故ニ今此章ニ於テ神道教ト國家トノ關係ヲ畧述セン
 第六十二節 億万斯年旭日ノ紅旗ヲ東海ノ天ニ翻翾セントスルニハ
 明ニ左ノ二條ヲ具有セザルベカラズ

(一) 皇室ノ尊嚴盛昌ナルコト

(二) 皇民ノ富強文明ナルヲ

之ヲ各國ニ徵考スルニ必シモ此二條ヲ具有スルヲ要セス其第二條ナル國民ノ富強文明ナル一事ヲ有セバ可ナリ殊ニ共和國ノ如キハ此一事ヲ以テ足レリトス然レモ我國ハ第一第二ノ二條件ヲ具有セザレバ爰ニ獨立ノ跡ヲ失ヒ斯ニ富強文明ノ實ヲ亡フ一ヲ欲クベカラズニテ有セザルベカラズ其理由ニ至リテハ我神道教中ノ諸君ニ説明スルハ無益ノ辨ケリ故ニ今之ヲ贅セス

第六十三節

(一) 皇室ノ尊嚴盛昌ナルヲ欲セバ我國民タルモノハ皇

室ノ尊嚴盛昌ナルヲ冀望セザルベカラズ苟モ一人タリモ之ニ背クアラバ國益ニシテ害ヲナス所以ノ理ヲ究メ之ヲ示サザルベカラズ之ヲ示スニハ必ス國家學政治學及我國史學等ノ力ヲ借リテ充分其原理ヲ示スヲ得ベシ然レモ既ニ論セシ如ク學問ハ道理標的ヲ示スノミノ

働キニ止マリテ之ヲ心ニ銘シテ實行セシムルノ力ヲ有セズ故ニ吾人ハ皇室ヲ奉戴スベキ原理ヲ國家學政治學國史學等ニテ之ヲ知ルト雖宗教上ニ立入りテ之ヲ心ニ銘シ心ヨリ皇室ノ尊嚴盛昌ヲ冀圖スルニ至リ終ニ實地ニ之ヲ行フニ進ミ其極ヤ山行かば苦むすかばね海行かば水つくかばねト云フニ至ラン宗教ニ依ラサレハ此極ニ進ムト難シトス若夫皇室ノ尊嚴盛昌ヲ冀圖スベキ理由ヲ知ラズ只之ヲ冀圖スルハ癡愚者ノ事ノミ况ンヤ今日ハ其理由ヲ知テ之ヲ信スル時代ニ於テヤ又其理由ヲ知ラザレバ所謂妄信ナリ故ニ傍人ヨリ皇室ノ尊嚴盛昌ヲ冀望スベキニ及ハズト言ハ、忽變信スルトモ、アラン此時既ニ其理由ヲ認知スル以上ハ人ノ言ニ左右セラルトナカルベキナリ

第六十四節 我神道ハ祖先教ノ進歩シタルモノニシテ造化三神ヲ祭祠スルヨリハ先王ヲ祭ルヲ以テ大ナリトス造化獨一ノ神ナル天之御

中主ノ六神ニ至テハ其奉祀スル格段ノ神祠ハアルヲ知ラズ此神道ノ祖先教タルノ一事ハ以テ我國躰ニ適スル處ナリ凡人其祖先ヲ敬スルキハ能ク其子孫ヲ厚クス吾人皇室ヲ奉戴スルニ皇室祖先ノ神靈ヲ敬セザルベカラズ敬セザレバ現今ノ皇帝陛下ニ不敬ヲナセルナリ故ニ佛教者タルヲ問ハズ耶蘇ノ徒タルヲ問ハズ苟モ我國ノ民タラバ皇祖皇宗ノ神靈ヲ敬セザルベカラズ皇室ノ尊嚴盛昌ヲ冀圖スルノ精神ハ一ニ源ヲ茲ニ發ス之ガ爲ニ運動シ海行カバ水つくかばぬトナル至ルハ一ニ此敬神ノ一點ヨリ來ル

第六十五節 我神道教ハ唯一ノ上帝ノミヲ宗祠スルニアラズ万神ヲ敬スルナリ然レモ万神ハ皆一ノ絶對ナル天之御中主之神ニ歸着ス蓋万有ヲ以テ一身トナシ玉フ最尊キ天神ニアリマシテ靈魂ハ皆御中主ノ神ト同根ナリ而我万神ナル所以ハ諸冊二神ヲ初メ皆國土ニ功勞ア

ル神人ノ靈魂ヲ祠宗スルヲ以テナリ是ニ於テ我神道ハ万神教ナリト雖蠻野ノ地ニ行ハル多神教ノ如キモノニアラズ齊シク天之御中主神ヲ祭ルナリ其祭ルヤ直接ニ之ヲ祭ラズ先ツ吾人ニ近キ處ヨリ之ヲ祭ル其近キ處ハ吾人ノ祖親ノ靈ナリ祖親ノ靈ヲ祭ルハ即天之御中主神ヲ祭ル所以ナリ此一事ハ我神道教ノ尤發達シタル一點トシテ見ルベシ我神道教ハ唯一ノ天之御中主神ヲ祭ル而基督ノ如キ唯一ニ偏滯シタルモノニアラズ我神道教ハ多神教ナリ而蠻野ノ地ニ行ハル妄想妄念ヨリ幾多無用ノ神ヲ製出シ故ラニ之ヲ祭ルカ如キ雜神教ニアラズ天之御中主神ノ神德ノ吾人ニ尤近キ處即吾人ノ祖親ヨリ之ヲ祭ルナリ我神道教ハ祖先教ナリ而野蠻人カ祖先崇拜英雄崇拜ノ如キモノト始メト同一ノ談ニアラズ此等ハ皆一ノ恐慌心ヨリ來ルモノナリ我祖先ヲ祭ルハ追遠申孝ノ誠心ヨリ出ルモノナレハナリ

第六十六節 吾人既ニ其祖親ニ厚セハ之ヲ皇室ニ移スベシ古人言ハ
 メヤ「孝以移君則忠」ト即皇室ノ祖先ヲ敬禮スベキト必セリ噫是レ我國
 民タルモノ尤盡スベキノ義務タリ苟モ生テ此土ニ稟テ粟ヲ此地ニ食
 ムモノ己ガ奉戴スル皇室ノ祖先神靈ヲ敬セズンバ何ヲ以テカ國民タ
 ラン之ヲ實行セシムルニハ佛ニ依ラシカ基督ニ依ラシカ曰否一ノ神
 道教ニ依リテ之ヲ實行セシメテ而后皇室ノ尊嚴盛昌ヲ冀望スル精神
 ヲ養成シ之ニ心力ヲ致スニ達スベキナリ

第六十七節 (二)皇民ノ富強文明ニ進ムト此一條件ハ佛教ニ依ルモ基
 督教ニ依ルモ其目的ヲ達スルヲ得ベシト殊ニ佛教ハ玄理深遠人
 智ヲ開展スルニ足ル基督教モ殖産工業ヲ獎勵シ富強ノ實ヲ擧ケシム
 ルニハ適スル所アリ是世人ガ喋々佛教ヲ以テ國教トナスベシ基督教
 ヲ以テ國教ト定ムベシト唱道スル所以ナリ余輩ハ佛教基督教トハ勢

正ニ反對ノ地位ニ立タサルベカラズ從テ其欠點弊害ヲ指摘セザル
 ヲ得ズ然レモ此第二條ノ一事件ハ此等二教ノ能目的ヲ達スベキヲ許
 スモノナリ此二教ハ日本國ヲ除カハ何ノ國ニテモ國教トナシテ可ナ
 リ

第六十八節 然ルニ我帝國ハ只此第二條ノ一事件ヲ以テ足レリトセ
 ス第一第二ノ條件ヲ具有セザルベカラザル理由ハ既ニ之ヲ述ベタリ
 第一條ヲ實行セシムルモノハ神道教ノ長所特有ナリ第二條ニ至リテ
 ハ布教傳道ノ方法未完備セザル以上ハ之ヲ善スル能ハザルヲアラン
 近人ハ第二條ニノミ着目シテ佛教基督教ノ利ヲ説キ未ダ第一條ニ着
 目シテ儼然論述セルアルモノヲ聞カズ殊ニ第一ノ條件ハ國家獨立ノ
 根本ナリ此根本ヲ除去スレハ富ハクニシスノ如ク強ハナボレオンノ
 如ク文化ハ進シテ英佛ト拮抗スト雖焉ソ我國タルヲ得ンヤ此等ノ

理由ハ以テ我教中ノ士ニ語ルニ足ラズト雖國脉維持上神道教ヲ擴張
 スベキ論理ノ大概ヲ述ベ諸君ノ奮發ヲ促スナリ
 第六十九節 神道教ト國家トノ關係ハ如此大ナリ祖先及皇室ニ關ス
 ル精神ハ古來冥々ノ裡ニ存シテ有爲ナル運動ヲナセリ佛教ノ如キ立
 理高妙ト雖此精神ニ勸化セラレタルニアラズヤ見ヨ彼本地垂迹ノ説
 ヲ立テ一步ヲ曲ゲテ我國神ト調和セリ我國神ヲ排棄セシトナシ見ヨ
 彼ノ寺院ハ釋迦阿彌陀ノ像外ニ無數檀家ノ靈位ヲ裝置スルコアラズ
 ヤ嗚呼日本佛教ハ祖先教ニ幾分ヲ應化セリ
 第七十節 神道ノ宗教トナリシハ近來ノ趣ナル所以ヲ説ケリ而我國
 古來ヨリ人心ヲ支配セシ祖先及皇室ニ係ル精神ヲ全ク把住シ來レリ
 是神道ノ宗教タルコト日淺シト雖此精神ハ最モ甚ク古シトス且又人ア
 リ言フ曰汝神道教ハ教旨廣大海外ニ擴張スルニ足ルト云ヒ而日本皇

室ノ祖先ヲ敬スルノ益アルヲ説ク然ハ則神道教ハ日本ノ一國ニ止ル
 宗教ナリ何ゾ前後ノ撞着セルヤト之ニ答フルノ容易ナルハ第六十五
 節及六十六節ヲ反復スルヲ以テ足レトス即神道ハ一神教ニシテ偏
 固ニアラズ多神ニシテ蠻野ノ雜神教ニアラズ其祖先教ナルハ追遠申
 孝ノ至情ヨリ出ツ此三性質ヲ兼有セリ此三性質ヨリシテ能ク皇室祖
 先ヲ敬スルニ至ルナリ只日本ノ皇室ヲ敬スルニ止マラズ若シ神道教
 ヲ英國ニ移サバ其信者ハ己ノ祖親ヲ敬シテ之ヲ女皇ウイクトリヤニ
 移シ其系統ナルハノトブルノ祖先ヲ敬スルニ至ラン万國ニ通シテ我
 神道ノ實效アルヲ知ルベキナリ然ルニ布教傳道其人ナク之ヲ布教セ
 ザルヲ以テ神道教ヲ卑視スルハ蓋識者ノ取ラザル所ナリ

第九章 神道教師諸君ニ望ム

第七十一節 既ニ宗教ヲ汎論シ後我神道教ヲ概論ス其完美極點ノ良

教タル性質ヲ具スルハ論シ來テ又言フベキナシ之ヲ發揮スルハ諸君ニアリ諸君ハ之ヲ發揮スル責任ヲ有セリ抑我太教ハ天地ニ亘リ悠久存在スト雖其人存スレバ我教舉リ其人亡スレバ我教ハ隱レシテ伏シテ乞フ余ガ言フ所ヲ虚心以テ熟察セヨ思フニ諸君ノ中同感同意ヲ抱懷セラルアラン或ハ未タ抱懷セザルモアラン其抱懷セラル諸君ハ其素志ニ合フヲ嘉シ以テ余言ヲ贊セヨ其未抱懷セザル諸君ハ虚心以テ余論旨ノアル所ヲ探リ批評可否セラレシテ切望ニ堪ヘザルナリ

第七十二節 余ハ諸君ガ我太教ヲ發揮センガ爲ニ盡力アランコトヲ望ムナリ之ヲ望ムニ二個ノ條項ヲ以テセザルベカラズ即第七章ニ於テ之ヲ擧ケリ第一項ハ同章ニ於テ論述セリ今其第二項ヲ畧述シテ以テ諸君ニ質サントス即之ヲ左ノ五項ニ分チ一言ス

一 教會制度

- 一 教會學校
- 一 祈禱禁厭
- 一 廣教機關
- 一 外部ニ對スル運動

第七十三節 教會制度 書一ノ制度ヲ以テ教會ヲ統治セザルベカラズ此點ニ至リテハ各教ニ管長アリ教務ニ老練ナル教正諸君アレバ余輩今此ヲ喋々スルニ及バズ只教師諸君ニ望ム一事ハ諸君ガ及ブ丈各教會ヲ盡一ニシテ我意ヲ張リ己ノ教會ハ甲教會ト外貌ヲ殊ニシ乙教會ト拜式ヲ異ニスルガ如キ點ナキ様注意シ各互照會シテ書一ニ歸スルヲ主トナスベシ是ニ於テカ各教會長教師信徒ノ相往來スルノ必要起ル乞フ互ニ懇親會ノ如キヲ催シ又ハ說教會ニ相招集スルガ如キヲ獎勵センコトヲ勉ムベシ而教會ノ外貌禮拜等ヲ盡一ニスルハ未ナリ尤

要スベキハ其誠教ノ要旨ヲ畫一ニスベキ事トス教會畫一ニナリ而靜肅ナル結果ヲ見ルベキナリ

第七十四節 敎學校 神道教ニ學校ノ設ケアルナシ是尤缺點ナリトス思フニ學校ニ要スルモノハ何ゾ曰經費ノ必要是ナリ敎師諸君ガ己一代ノ裏ニ我太教ヲ發揮スルヲ能ハザルモハ之ヲ後昆ニ遺囑スベシ遺囑其人ナケレバ止マシノミ嗚呼遺囑其人ナカラシカナキニアラズ其人ヲ作ラザルニ依ル其人ヲ作ル學校ニ依ルベシ乞フ深ク其人存則其政舉ノ一語ヲ思ヘヨ而其人ノ存セシテ欲セバ先ツ學校ヲ設立シテ其人ヲ作ル事甚肝要ナリ况ンヤ現今我神道教中ニ泰西ノ學術理想ヲ研究シ能ク當世ヲ看破シテ布教スルノ士幾人カアル現今敎師其人ニ乏シキハ實ニ余輩ノ憂フル所ナリ故ニ現今ノ急務ハ敎學校設立ノ一要件焦眉ノ急務アル而已矣

第七十五節 敎學校ハ政府カ小學校敎師ニ要スル師範學校ノ如キモノトシテ設立スベキナリ先ツ二三年ノ間ニ數十名ノ眞敎師ヲ得ルヲ目的トシテ設立スベシ其後ニ至リ神道教大學ヲ設立スルモ晚キニアラズ乞フ敎師諸君ヨ學校ノ急務ナル所以ヲ了知シ是ガ爲應分ノ盡力アラソフテ

第七十六節 祈禱禁厭 祈禱禁厭ハ世人往々之ヲ斥ク然レモ神道ノ末流ハ大概之ヲ目的トスルガ如シ是ニ於テ世人往々神道教ヲ卑視ス亦已テ得ザルナリ然レモ祈禱禁厭ハ學術上理ヲ以テ充分説明スルヲ得ルモノニシテ彼ノ「コツクリ」ノ如キモ之ガ説明ヲ試ムモノアルガ如シ先ツ心理學哲學ノ區域ニ入レバ充分説明シ得ルト雖モ其極處ハ之ヲ不可思議ノ道理ニ歸着スルカ否ラザレバ神明ニ歸スルノ外ナキナリ故ニ歐米ニ於テモ古代ハ祈禱禁厭ヲ尙ヒ中世之ヲ斥ク近世又之

ヲ稱スルニ至ル蓋近世の學理上ヨリ説明シテ之ヲ信ズルナリ余ハ祈禱禁厭ノ理ヲ信シ其効驗ヲ著キヲ知ルモノナリ益之ヲ利用シテ世益アルヲ願フモノナリ乞フ教師諸君ヨリ祈禱禁厭ノ理ヲ哲理上説明シ而後之ヲ利用セヨ徒ニ理ヲ以テ解スベカラザルモノトナスキハ遂ニ世人カ卑視スルニ至リ我神道教ノ躰面品格ヲ墜スニ至ラン

第七十七節 廣教機關 我神道教ノ品格教旨等ヲ世人ニ知ラシムル機關ハ演說出版ノ二事ニ出テズ出版ハ雜誌新聞教書等ノ出版ヲ以テ最トス先ツ機關トシテ雜誌ヲ出版スルヲ以テ急務トナスベシ其他幾多ク書ヲ著シ之ヲ出版シ廉價ヲ以テ發賣シ信徒一般ニ配布スルノミナラズ教外ノ士ニ之ヲ配布シ其信スルト信セザルトヲ問ハズ先ツ我神道教ノ如何物タルヤヲ知ラシムルヲ以テ第一義トナスベシ既ニ之ヲ知ル而後之ヲ導クニ至ルベキナリ

第七十八節 外部ニ對スル運動 神道教師ハ必シモ教内ノ事務ニノ止ムベカラズ社會進歩ヲ助クベキ外部ノ運動ヲモ爲スベキナリ外部ノ運動トハ各種ノ事ニ從事スベシト言フニアラズ只道德慈善ニ關スル一事而已決シテ興利殖産ノ如キ事ニ關スベカラズ其目的善ニノ好意ヲ以テナスト雖宗教ノ教師タルモノハ興業殖産ノ事ト職ヲ異ニシテ經驗ヲ欠キ全ク意想外ノ境遇ニ逢ヒ敗ヲ取ラサルモノ稀ナリ乞フ之ヲ爲スコ勿レ而慈善會勸化院保護會社慈善學校教育ニ關スル會社學校普通學校貧院病院救濟院ノ如キモノハ我神道教師カ奮テ之ヲナスベシ而ナス能ハザルキハ他ニ之ヲ爲スモノアルニ際シ一臂ノ力ヲ添テ盡カスルヲ以テ興教ノ媒介トナスベシ蓋我神道教ガ勢力ヲ社會ニ得ルハ此等ノ點ヨリ始マル乞フ神道教ヲ獨善主義ノモノタラシメバ余此等ノ言ヲ述ベサルナリ神道ハ獨善主義ニアラズ而現今往々

他ニ及ホス勢力ノ弱キヲ見ル實ニ遺憾トスル所ナリ教師諸君ヨ佛教
 ニ所謂自利利他覺行圓滿ノ語ヲ忘ル勿レ上古諸神カ葦原ノ中津國ノ
 青人草ヲ爲ニ經營シ玉ヒシ功德ヲ追慕シ奮テ國家ノ爲ニ盡ス所アラ
 シヨチ期セヨ

第七十九節 若夫レ人アリ曰ハシ我神道教ハ天地開闢ニ兆シ其道載
 セテ古事記日本紀ニアリ何ソ喋々スルヲ用ヒシ又何ソ彼外教ノ爲ニ
 倣ヒ之ヲ宗教ヲラシムルヲ用セント余輩屢此語ヲ聞ク悲ヒ哉神道教
 ヲ成立セシメザルハ此輩ノアルニ由ル乞フ余ガ此小冊子ニ縷々述説
 スル所ノ旨意ヲ熟慮アラソチ且ツヤ其載セテ記紀ニアリトスルニ
 果シテ何等ノ功用ヲナスヤ死物ナリ嗚呼美玉アリ之ヲ藏ムルハ孔子
 ノ取ラサル處ナリ善價ヲ待ツハ孔子ノ欲スル處ナリ神道ノ教旨タル
 万教ニ秀テタル善價ヲ有セリ之ヲ匿ニ藏テ死物トナス孔子ヲシテ見

セシメハ果シテ如何ゾヤ請フ之ヲ思ヘ

第八十節 且我邦ハ工藝術ヨリ、百料理學ニ至ル迄之ヲ泰西ニ學ブ
 彼ハ師ナリ我ハ子弟ナリ是苟モ志ノアルモノ忍ブ能ハザル處ナリ余
 不肖ト雖常ニ之ヲ慨シ神道教固有ノ性質ヲ發揮シテ良教トナシ以テ
 我師トナリ彼ヲ導キ外教ノ弊處ヲ匡正シ管ニ之ヲ我日本帝國內ニ擴
 張スルノミナラズ瀛外粟散ノ邦國ヲシテ之ヲ奉シ無數ノ人民ヲ救濟
 セントス狂愚漫ニ此大志ヲ抱ク我神道ノ教師諸君狂妄ヲ憐ミ其志ヲ
 嘉シ以テ同感アラソチ切望ニ任ヘズ吁我狂妄ナリ然レモ亦敢テ疎
 放磊落自カラ漫言ヲ吐クニアラズ聊紹述スル處アラントス今我大成
 教管長平山省齋翁ノ七律一首ヲ錄シ以テ本篇ヲ結ブ

自笑迂疎老未休。百年徒抱万年憂。目橫鼻直今猶昔。柳絲花紅春又秋。螻
 蟻負山力何小。名教墜地淚難收。吾東賴有傳家寶。分與餘光照五洲。

明治二十三年一月八日印刷
明治二十三年一月九日出版

定價金十五錢

著述人
兼發行人

東京府士族

磯部武者五郎

東京小石川區諏訪町
四十四番地

印刷人

根岸高 光

東京牛込區市夕谷加賀町
一丁目二十三番地

印刷所

秀英 舍

東京京橋區西紺屋町
二十六七番地

賣捌大元

東京市本郷區本郷四丁目五十三番地

會通雜誌社

